2023

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
3月号
No. 717

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
2月号
No. 716

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
1月号
No. 715

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
6月号
No. 720

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
5月号
No. 719

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
4月号
No. 718

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
9月号
No. 723

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
8月号
No. 722

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
7月号
No. 721

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
12月号
No. 726

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
11月号
No. 725

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
10月号
No. 724

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
1月号
No.715

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します

二〇二三年
令和五年
癸卯（みずのとう）

二〇二三年は卯年。干支の「癸卯」にあたる。

「癸」は10段階の最後。次の生命を育む準備が完了した状態。水の弟とは陰陽五行説の「水の陰」のことで小寒、閑静、渋滞を表す。

「卯」は12段階の4番目。草木が地面をおおう状態。陰陽五行説では「木の陰」にあたり、控えめに成長することを表している。

「癸」と「卯」は「水生木」という水が木を育む「相生」の組みあわせなので、寒さが緩んで萌芽を促す年ということになる。

「納音」という物差によると「癸卯」は昨年の「壬寅」と同じ「金箔金」で、鍛錬すればもともと持っている金の資質が磨かれて力を発揮することを意味する。

京都では中学校いけばな体験教室が全校で行われるようになった。生徒達が花を大切にいけている姿を見ると、いけばなが持っている本来の力に気づかされる。

花のいのちが人の資質を磨く。

白文字　＜2頁の花＞　仙溪

花材　白文字（楠科）水仙（彼岸花科）
　　アスター（菊科）
花器　陶水盤

シロモジはハタウコンとも呼ばれ花はアオモジやクロモジに似る。枝はとても硬いため器の外で剣山にとめてからいけた。アスターは別名エゾギク。赤花の品種は水仙によく似合う。

バラの実と薔薇　＜3頁の花＞　櫻子

花材　薔薇（ばら）の実（薔薇科）
　　薔薇数種（薔薇科）
花器　陶花瓶

バラ園から届いたバラはつる性のものが多い。バラの実にからませながら少しこちらを向いて微笑んでくれている様だ。

寒椿

仙溪

先月から家族が一人増えた。名前は「柊介（しゅうすけ）」とつけられた。良い名だ。ヒイラギの白い小さな花は秋の庭に甘い香りでその存在を知らせてくれていた。その香りは彼の誕生を心待ちにした日々と重なる。

中庭のヒイラギの横で、紅白のカンツバキが彼の誕生を祝ってくれている。

11月中頃から1月にかけて、中庭に咲く紅白のカンツバキ。秋から咲いて花びらが1枚ずつ散るのでサザンカと呼ぶこともできるが、本来の名前はサザンカとツバキの交雑種であるカンツバキ「シシガシラ」である。

獅子頭は獅子舞の獅子の頭のことで邪気を追い払う力があるとされる。柊介ちゃんのすこやかな成長を願う。

寒椿の生花　2作　仙溪

花型　草型　留流し（4頁）
　　草型　副流し（5頁）
花材　寒椿（椿科）
花器　銅花瓶（4、5頁）

赤花のカンツバキ（もしくはタチカンツバキ）の大きな枝を数本買って生花を2作いけた。赤茶けた葉色が季節を感じさせる。5頁の「副流し」は苔の付いた太い幹で景色をつくった。4頁の「留流し」は長い横枝を留に生かし、庭の白花カンツバキを切って留の沈みと控に加えている。

色と形の違う銅器にいけたが、どちらも安定が良く又配りがしっかりかけられていけやすい。とても重宝している。

横から見た奥行

白玉椿の生花

＜6頁の花＞　健一郎

花型　行型
花材　白玉椿（椿科）
花器　陶花器

11月にテキストを創刊から今までもう一度読み直した。白玉椿は曽祖父のお気に入りの花だったそうで、それは文章、写真から十分に伝わる。白玉椿の品や、奥深さに魅了されていたのだと思っている。そして、曽祖父の白玉椿の生花は他の生花と比べても特別な雰囲気を醸しているように感じる。

私も白玉椿の生花を生けて写真に撮ってもらった。

孫である私の母は、そんな祖父が椿を生ける時のモノマネをよくしていたらしく、40年ぶりに私にもその姿を見せてくれた。椿を撓（た）めるときに唇を尖らせるらしい。そんな昔話をしながら、再び私は母親と一緒に白玉椿の生花を生けて楽しんでいた。先祖から脈々と受け継がれる伝統とも言うバトンの一部を預かった気がしている。焦らずゆっくりとお花を味わっていきたい。

柊南天胴の立花

＜7頁の花＞　健一郎

花型　除真立花（のきしん）
花材　白玉椿（椿科）
若松（松科）
寒桜（薔薇科）（ばら）
柊南天（目木科）（ひいらぎなんてん）
伊吹（檜科）
寒桜（薔薇科）
肥後菊（菊科）
花器　陶花器

流祖の立花の中には「古人も挿しもらしたる花形」として新たに立てた挑戦的なものがいくつかある。「南天胴」もその一つだ。そこから着想を得てはいるが、自分なりに草木の赴くまま立ててみた。

他の役枝に柊南天を配してもとは思うがなかなか請などにあうものはない。

常緑の植物中心にとりあわせ、柊南天の葉の色を生かそうとした。

12月の薔薇と若松

＜表紙の花＞　櫻子

花材　若松の脇枝（松科）
　　薔薇（ばら）（薔薇科）
　　オンシジウム（蘭科）

花器　陶花瓶（トルコ）

京都おくだバラ園からは冬にもいろんなバラが届けられた。返り咲きや四季咲きのバラ。見事な花を咲かせている。香りのよい赤バラには1本の茎に4～5輪も大輪の花を咲かせているのに、しなやかで折れる事はない。クリスマスから新年にかけて華やかにエレガントに咲いてくれた。

カンツバキとメイちゃん。

家元とレモン師匠。お花拝見！

立華時勢粧を読む ⑥④

仙溪

立華時勢粧の立花秘傳抄には和歌が多く引用されていて花の異名※を知る事が出来る。松、竹、梅で流祖が選んだ歌を紹介してみよう。

松

蔵玉集

大内や百敷山の初代草※いくとし人のなれてそゆらん

同

春の野や雪げの沢の延喜草※花咲きにけり雪におわれて

神山のふもとに植える千世見草※うえおきてこそ御調物なれ

竹

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべきなり

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり河玉草※をなにといふべき

月にきく夕玉草※の秋風に音はいつ頃寝覚めとはまし

梅

古歌

万代に咲るなかにも初名草※春をまたでや花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる香栄草※かな

山里の軒端にさける風見草※色をも香をも誰見はやさん

「蔵玉集」とは室町時代の歌学書で、草木・鳥獣・十二月の異名などを詠んだ歌を集めて解説を加えたもの。連歌の参考辞書のようなもので、その前には「莫伝抄」があった。

「蔵玉集」は二条良基（1320～1388）が、「莫伝抄」は源俊頼（1055～1129）がまとめたとされている。

源俊頼は平安時代後期の貴族、歌人で、歌論書「俊頼髄脳」はのちの歌人に影響を与えている。

二条良基は南北朝時代の公家、歌人、連歌の大成者とされている。

連歌とは日本古来に普及した伝統的な詩形の一種で、短歌の上の句（前句）5・7・5に別の人が下の句（付句）7・7を即興的に詠んで完成させる短連歌と、発句5・7・5と脇句7・7を交互に複数人で詠み連ねていく長連歌がある。

先日、南座での顔見世歌舞伎興行に片岡仁左衛門さんが出演されたので見に行ったが、仁左衛門演じる元平戸藩主、松浦鎮信侯は連歌が好きで、歌の師匠・宝井其角を屋敷に呼んで家臣と連歌の勉強会のようなものをする場面があった。

歌舞伎「松浦の太鼓」の一場面
出典：こんぴら歌舞伎オフィシャルサイト

時は元禄15年12月14日、赤穂浪士による吉良亭討ち入りの日の設定。松浦侯は赤穂浪士が仇討ちする様子も無く1年が経つ不甲斐なさに苛立っていたところ、其角から赤穂浪士との昨日の風流なやりとりを聞き、ちょうどその時聞こえてきた陣太鼓の打ち方から討ち入りを悟り、自分も助太刀に向かおうとする。松浦侯の喜怒哀楽の表情にどっと場内が沸いていた。

この歌舞伎の鍵となるのが連歌と陣太鼓だ。前日に赤穂浪士の一人、大高源吾が其角との会話の中で、

「年の瀬や　川の流れと　人の身は」

と其角が言ったあとを受けて

「明日待たるる　その宝船」

と源吾が返したことを聞いた松浦侯。その意味するところを思案していたところに聞こえてきた陣太鼓。「バン、ドンドンドンドンドン」それはまさに自分が学んだ山鹿流の太鼓であり、同門に大石内蔵助がいたことを思い出す。そして打ち手は内蔵助と確信し狂喜する。

話が立花時勢粧から逸れたが、冨春軒が花材解説に選んだ歌に「蔵玉集」という連歌の辞書からの引用があるのは、自らも連歌を嗜んでいたのだと思う。前句に対し即興で機知に富んだ付句を詠むのは、個性ある枝や花を自在に合わせて立てる立花と似ている。どちらもその時代の風流なのだ。

南天の立花

〈4頁の花〉　仙溪

花型　除真立花
花材　南天（目木科）
若松（松科）
椿（椿科）
躑躅（躑躅科）
水仙（彼岸花科）
寒菊（菊科）
枇杷（薔薇科）

花器　陶花瓶

先月号の立花図に刺激を受けて、南天と若松の対比を試みた。

胴に南天を使わなかったので見越の若松が目立って感じるが、新春らしい立花となった。庭の侘助椿がいい味を出してくれている。

立花時勢粧の絵図を何度も見比べていると、立てた人の力量に違いがあるのがわかる。

流祖の花は自然の妙を味わい尽くしている感じがする。そして個性的なそれらの枝や花がつくる世界感が凄い。

松竹梅

花伝書を見る

立花（りつか）　松除真（まつのきしん）

「松竹梅」

冨春軒

老松　若松

竹　枯竹　熊笹

紅梅　白梅　苔梅

（立花時勢粧・下）

古来より祝言の花として松、竹、梅を真にした三瓶を並べることがあり、また松竹梅を一瓶に立てることもされたが、他の草木をまじえず松竹梅だけで立てることは古人も指しもらした花形で、真の松竹梅と呼ぶべきか、と書いている。

松竹梅それぞれに老若の対比があり、変化のある竹と共に力強い生命を感じる。

若松の真の勢いに、未来への願いが託されている。

桑原専慶流いけばなテキスト715号　2023年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

良い季節

健一郎

花型　草型　留流し
花材　寒桜（薔薇科）
　　薮椿（椿科）
花器　銅薄端

季節を生けること、味わうことが一番の贅沢であると思っている。出産を目前に妻は毎日御所を最低一万歩以上歩いた。私がお供することもしばしばあった。「あそこめっちゃ赤い！」「あそこめっちゃ黄色い！」と楓や紅葉の葉を目指して歩いていた。銀杏の大木は少しづつ色を濃くしていき、ゆっくりと葉を落としていく。一週間以上も通い詰めるとその様子が良くわかる。

落ち葉を蹴飛ばしながら、寝転びながら、木にぶら下がり、登りながら歩いていく。一つ一つを味わいながら歩いていく。妻はそれを笑いながら写真に収めたり、落ち葉を集めてきてくれる。26歳児の世話は手がかかるそうである。遊び疲れ帰路につくと、一本の桜と出会った。静かに強く咲いていた。足を止め寝転ぶ。これでしばらくは二人きりでの行楽は休止になろう。これからは柊介と三人で季節との豊かな出会いを味わっていきたい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
2月号
No.716

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

いちご狩り

＜2頁の花＞　健一郎

花材　冬苺（薔薇科）
　　雪柳（薔薇科）

花器　備前焼花器

妻の菜月とよくいちご狩りに出かけた。3年前にはその思い出を生けた花遊びをした事もあった。幼い頃よりいちごが好きで、親になっても変わらず、いまだに2人で苺を取り合っている。

山に出かけると菜月はよく、蛇苺（へびいちご）、木苺（きいちご）、冬苺（ふゆいちご）などを見つける。僕が肩車してなんとかもぎ取ることもあった。

冬苺は他の苺と比較して早く結実する。少し早くに咲いた雪柳と取り合わせた。見て楽しみ、食べて、生けて楽しむ。

花の出逢いと そのバランス

＜表紙の花＞　仙溪

花材　シンピジウム（蘭科）
　　葉牡丹（油菜科）

花器　フランス製陶鉢

いけばなの良し悪しは、花がいかに生き生きしているかによるところが大きい。そのように見えるためには個々の花を生かす技術を磨く一方で、花たちにその内なる魅力を発揮させるための出逢いを工夫することが鍵となる。

飴色のシンピジウムに白いハボタンを組みあわせて緑色の鉢にいけると、花たちが勢いよく輝きだした。

ここに別の花を加える必要はないし、それぞれの分量も丁度いいバランスだ。

暫くしてハボタンが大きくなったら、シンピジウムの葉を足すといい。

蘭の実

＜3頁の花＞　櫻子

花材　熨斗蘭（蘭科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）

花器　ドイツ製ガラス花器

珍しい蘭の実を葉とともにいただいた。ノシランだと思う。ノシランはキジカクシ科ジャノヒゲ属の多年草で暖地に分布する。ジャノヒゲと同じく庭の下草にされるそうだ。緑色の実は濃い青色に熟す。

球根のまま売られていた可愛いラッパスイセンには「テタテート」という名前がついていた。フランス語 tête à tête（頭と頭）は頭を寄せあってないしょ話をすることを言う。

蘭の実に合わせて小さくいけると、話し声が聞こえてきそうだ。

啓翁桜の生花

＜4頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　啓翁桜（薔薇科）
花器　煤竹竹筒

ケイオウザクラは固い蕾でいけても必ず咲いてくれる。比較的撓めやすいので生花でいけることも多い。逞しく、頼もしい、とても有難い存在だ。

とはいえ、撓める時は「花が咲きますように」と祈る気持ちが大事だ。花が咲いてこそのいけばなである。

啓翁桜の立花

＜5頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　啓翁桜（薔薇科）
伊吹（檜科）
金葉小手毬（薔薇科）
満作（満作科）
椿（椿科）

都忘れ（菊科）
小菊（菊科）
鳴子百合（百合科）

花器　銅立花瓶

昨春の立花研究会で立てた立花。花屋で手に入る素直な枝で面白みのある花形を作るのは難しい。控枝のイブキ（ビャクシン）がいい味を出してくれた。

蝋梅（ろうばい）の季節

健一郎

花材　蝋梅（蝋梅科）
　　レリア（蘭科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花瓶

家元の取り合わせたお花をいけさせてもらった。自分ではできない取り合わせだが、気に入っている。苦心したが見せたいところを見せることができた。蝋梅の実の殻が珍しく、落ちても枝に引っ掛け飾っていた。

よく僕が見にいく、早咲きの梅と同じくらいの季節に、蝋梅は御所で咲いている。寝転がって澄んだ冬の空と香りと色を楽しむ。数年前に、琵琶湖で見た大きな蝋梅が忘れられない。空と湖によく映り堂々としていた。妻の家族と出かけた時だった。義兄の操縦するドローンを目がけて走った。息が切れると大きく息を吸う。これほど蝋梅を吸った日もなかっただろう。いい香りだ。

水際除の立花

＜7頁の花＞　健一郎

花型　除真立花
「水際除」

花材　松（松科）
彼岸桜（薔薇科）
金葉小手毬（薔薇科）
伊吹（檜科）
児手柏（檜科）
紫花菜（油菜科）
小菊（菊科）
鳴子百合（百合科）

花器　陶花瓶

遠景に春の息吹を感じる立花になった。胴にひょこっと除く芽吹きも可愛らしい。立花でなくても表現はできるが、昔からこのように草木を味わい、季節を思っていたと考えると感慨深くいいものである。そうありたいものだ。

自分と自分

健一郎

12月7日午前1時59分にそれはそれは元気な産声が。

このご時世に幸運にも奇跡の瞬間に立ち会う事ができた。夫婦共に様々な治療を受け、産まれた待望の我が子である。特に妻と柊介は本当によく頑張ってくれた。

子供が産まれるとグループホームでは意識していた、自分が環境であるという認識を家庭内でも強く持つようになった。産前は全く気にもならなかった事を問題だと捉えるようになったのが変化である。

私は最大限、自分自身を大切にし、可愛がり、甘やかしてきたつもりだったのだのだが、それ以上の事をしたいと思える人が現れた。十分に自分が満たされていたと思っていたのだがまだ先に続く道はあったのだと驚いている。不思議である。

人から見られた自分を想像する事はあったが、子供が産まれると明確に見せたい自分でもある事に気がついた。そしてそれは、なりたい自分でもあった。つまり、僕はこのままの僕でいることが大切だということだ。

日本では、不思議な事に自分を指す言葉が相手を指すことにもなる事がある。自分という言葉や、僕は、私はという言葉も相手にも自分にも使うものの一例である。英語であれば「I」「you」ではっきりと別れており相手のことを「I」と呼ぶ人はいない。人を思うおもてなしの文化とも関わっているのかなと想像も膨らむ。自分がされて嬉しい事を人にしなさいという教育もよく聞くが関係がありそうだ。

色にしてもそういった曖昧な領域があるようだ。具体例としては、信号機の青色は、緑色だが、法律でも青色と表記されているらしい。青菜も葉っぱは緑色なのにも関わらず青色という。赤黒白以外の色は古代から平安時代頃まで「あお」色と総称されていたそうである。ある仮説によると、固定していない変化するあらゆる色はあお色だったらしい。この日本語の、日本の風土のあやふやさが僕は好きだ。自分も相手も、自然も関係なく全てが溶けたようにあやふやな世界が。心地がよさそうである。

漢字、ひらがな、カタカナを使い、ローマ字を使い、年末になるとお墓参り、クリスマス、除夜の鐘、年が明けると初詣、お年玉をこなす日本人が否定的に捉えられる事もあるが人と人の繋がりが強くなり、インターネットで世界が狭くなった今、私個人の感想としては悪い気はしていない。それぞれの文化を勝手な解釈で生活の中に落とし込み日々を楽しんでいるように見える。

お花に触れたことのない人が、お花に触れ、お花を家に持って帰ってもらえるイベントの機会をいただくことがある。お花でなくとも、お茶でも和歌もいい。その国の季節と風土と共に育まれ、時代と共に変化し続けながら残り続けるものに関心がある。特に衣食住は見ていて面白い。季節と共にあり、様々な工夫や遊びがそこにはある。その断片を少しでも人に伝えているうちに、将来は季節と共にあるような人達と共に過ごす事ができたら良いなと夢を見ている。一日を味わいながら丁寧に生きていくことが時代を追うごとに難しくなる気がしているが、それでは寂しい気がする。

「忘己利他（もうこりた）」とは、自分を忘れて他人のためにつくすことをいう。「己を忘れて他を利するは、慈悲の究極なり」と最澄は述べている。海の大きさを身をもって体感できるかと言われれば難しいのと似ている気がする。それだけの精神を是非とも身につけたいのだが、こう言っている間はまだその道は遠く、険しそうである。己を無くす事は他と溶けるということでは無いだろうか。私自身が追求したく思っている、花と溶けるというテーマとも密接に関わってくる。

己を忘れるほど自分を満たせば、他を利する心が芽生えるのではないだろうか。自分が良い状態でいなければその環境を、人を、花を生かすことは到底できない。これからも自分を整え、大切にし続けていき、自分がその環境、季節に抱かれながら在り続け、その実体験を人に伝えたく思っている。そこに自分と環境の区切りは無い。

自分が在ると言う事は曖昧で不確かなものなのかもしれない。

レモンも一緒に健一郎先生の立花を拝見。

除心立之内真之花形

花伝書を見る

立花　木蓮除真
除真の内真の花形
冨春軒
木蓮　伊吹　松　柘植
躑躅　小菊　樫木　枇杷
著莪　要
（立花時勢粧・上）

花形ばかりになってしまったと冨春軒は嘆いている。

昔の名人はあえて扱い難い真（の枝）を探し、工夫をこらすことで色々な花形を生み出した。それらは除真のうち行の花形と言い、花に自由を得て様々に景色を変え、人の心を慰めたと書いている。

この立花図には「近ごろ出された花伝書に多く載る花形」で「これ私の作意にはあらず」と添えられている。

除真のうち真の花形は仏前対の花に必ず用いる花形なので出し所や寸法に定めがある。そのため人に立花を教える最初の花形となったが、それゆえに今では立花といえばこの

この木蓮の立花は充分に美しいが、立花の醍醐味はまだまだこの先にあるのだよと冨春軒は伝えたかったのだろう。

神の柱・壱岐島

仙溪

正月明けに「天と地を繋ぐ神の柱」の名をもつ島を訪れて神社巡りをしてきた。

対馬とともに古くから大陸との交易の拠点として栄えた壱岐島（長崎県）。中国の歴史書三国志（3世紀）の『魏志』倭人伝にも「一支国」の名で登場する。『古事記』の国生み神話では5番目に生まれ、神々が行き来するための天と地を繋ぐ柱「天比登都柱」であると記されている島だ。島内には150社以上も由緒ある神社が点在し、280基の古墳に加えて弥生時代の遺跡も発掘されている。

南北17キロ、東西14キロの小さな島だが、ほとんどの食材が島内で賄える。海産物、農産物、畜産や養鶏、養殖によって自給自足が可能な恵まれた島だ。想像するに太古より交易の拠点であると共に、豊かな自然の恵みをもたらす神への祈りの場でもあったのだろう。

しかし人や物が行き来する場所は平和な時代はいいが、隣国が領土を広げようとした

内海湾の小島神社。潮が引いたときだけ渡れる。祭神は素戔嗚命。

シマカンギクとクロツバキ。

潮が引くと天然の牡蠣も現れる。島のおばさんが身を採り集めていた。

猿に見える「猿岩」は壱岐島誕生の神話によると島を繋ぎ留めた８本の柱の一つ。

過疎化で空いた畑ではバナナ栽培が。無農薬で皮まで美味しく食べられる。

島内のしめ縄にはヤツデの葉が。ヤツデには魔除けの力があるためか。

白沙八幡神社の鎮守の森は神秘的。写真は威厳あるイヌマキの巨木。

場合は侵略の犠牲にもなる。壱岐には女真族による刀伊の入寇（1019）と元寇襲来（1247・1281）によって蹂躙された苦しみの歴史がある。

しかし現在は自然の恵みに支えられた穏やかな島だ。神への祈りは今も引き継がれ、現職の神職のみで行われる壱岐神楽は秋から冬にかけて島中の神社で奉納されているそうだ。

今回の旅では壱岐の食材を堪能した。クロアワビ、サザエ、クエ、ノドグロ、ミズイカ、壱岐牛、ママなかせ（トマト）などなど。麦焼酎は壱岐発祥だそうだ。最近では地ビールやバナナ栽培も始まっている。

訪れた幾つかの神社では感謝とともに願い事もさせていただいた。断崖で強風を、砂浜で穏やかな波を、鎮守の森で巨木を体感したことも、神の柱の島を印象深くさせる。

目に見えないゆえに畏れ、目に見えないゆえに敬う。神とはそういうものなのだろう。命を育む自然の大いなる力に神を感じる。自然の恵みに感謝し尊ぶ気持ちを忘れずにいたい。壱岐島は神を感じる島であり続けて欲しい。

奈良・平安朝よりの白沙八幡神社、祭神は神功皇后、応神天皇他。拝殿は平戸藩主・松浦鎮信が寄進した36歌仙図に因んだ絵で埋め尽くされている。

先月号で紹介した松浦鎮信縁の地。これも何かのご縁。

島の東端、左京鼻から玄界灘を見る。壱岐島誕生の神話で島を繋ぎ留めた「折れ柱」の一つ「観音柱」が荒波に洗われる。海の向こうには宗像大社の境内地であり「神宿る島」沖ノ島がある。

桑原専慶流いけばなテキスト716号　2023年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

いけなおし

＜12頁の花＞　仙溪

花材　白文字（楠科）
　　桜草（桜草科）

花器　陶花器

先月号で水仙といけたシロモジが一ヶ月たっても元気なので、短くしてサクラソウといけなおしてみた。固かった花の蕾も膨らんで、数カ所咲き始めている。

さらに2週間が経ち、ほとんどの花が咲いてくれた（左の写真）。毎日私たちの暮らしと共にいてくれる。小さな花たちが健気で愛おしい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
3月号
No.717

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

春の花木の投げ入れ

＜表紙の花＞　健一郎

連翹（木犀科）
雪柳（薔薇科）
ベネチアン・レースグラス

花が密についている連翹を雪柳と共にかろやかに生けた。良き春の出会いである。バック紙と器の選択で自分が引き出したい植物の魅力をより分かりやすい形で現すことができた。いけばなに限らずだが、構成する要素一つ一つのこだわりが一つの世界観を作り上げる。

可憐な風情

＜2頁の花＞　櫻子

スカビオサ（松虫草科）
チューリップ（百合科）
マイセン花瓶

スカビオサは葉の無い場合が多いが、花弁が複雑で微妙な色合いがあり、細い茎は針金のよ

う。たとえ葉を添えなくても充分に綺麗で瑞々しい。華奢な花器にいけたなら、それだけで満足してしまう花だけど、作例ではチューリップを添えた。

枝の形にあわせる

＜3頁の花＞ 仙溪

小手毬（薔薇科）

チューリップ（百合科）

陶花瓶（谷口良三作）

コデマリの足元にT字配りをしておくと、チューリップがいけやすくなる。コデマリの枝振りは千差万別。上下二段に出して、その姿に合わせてチューリップをいけてゆく。

サイズをあわせて

＜4頁の花＞　仙溪

木苺（薔薇科）
ヒヤシンス（キジカクシ科）
ストロベリーキャンドル（豆科）
陶花瓶（崔龍熙作）

足元に咲く小さな花を2種出合わせて、芽吹き始めた枝を足し、小ぶりの器にいけた。キイチゴの若葉が広がり、花はどちらもぐんぐん伸びてくる。ヒヤシンスの甘い香りも楽しめる。

頼もしい繁み

＜5頁の花＞　仙溪

雪柳（薔薇科）
アマリリス（彼岸花科）
金盞花（菊科）
陶コンポート

キンセンカはあまりいけてこ

なかったが丁寧に扱うことで豊かな緑と鮮やかな花色を楽しめる。時々全体を水で洗い、いけなおすと元気でいてくれる。

アマリリスとも仲が良さそうだ。ユキヤナギの白い花が爽やかに広がる。

レモンとメイ
一緒にお花見ようよ！

陽光桜の生花

＜6頁の花＞　健一郎

陽光桜（薔薇科）

天女文銅花瓶

生花　草型　副流し

お気に入りの天女の器に桜の生花を生けた。毎年必ず咲いてきた桜だが、今年も咲くのかと心配になる時がある。2月の初め頃から気にするようになる。よっぽどのことが無ければそうはならないのだがそんな不安を時々抱く。咲いた時は毎年心が動く。特別なお花である。

柊介が家に来てくれた日から睡眠環境が変わったからか、最近、夢をよくみるようになった。今の所毎度お花が登場するのだが、へんてこな夢ばかりである。一説によると夢はモノクロであるらしいが、花が夢に登場すると、どうも夢はカラーなのではないのだろうかと思ってしまう。断片しか思い出せないことが多いが、大概は気分の良い夢で目が覚める。

今年も無事綺麗に桜が咲いてくれた。やれやれである。また同じ心配を春前にはするのだろうか。

アマリリスの生花

＜7頁の花＞　仙溪

アマリリス（彼岸花科）

陶鉢

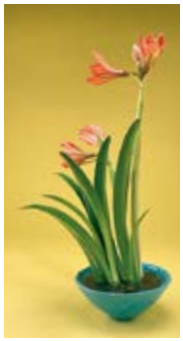
生花　行型

アマリリスは中南米、西インド諸島原産で約90種の原種があるそうだ。切り花でよくいけられるのは写真の品種だが、濃赤色やピンク、純白、絞り、八重咲き、剣弁、丸弁などの品種もあり、それぞれに違う雰囲気を持っている。

アマリリスの魅力は長い茎と力強い花の姿にある。珍しい品種は花だけで売られていて、アマリリスの立ち姿に何を合わせるかを考えるのが楽しい。

球根から出る葉は株の内側から次々と生まれ、花は古い葉と新しい葉の間から伸び出る。生花でいける時には花を後方に立て、葉はその前に挿す。

いけた時は真っ直ぐだった葉が少し反ってきて、花も咲いていい感じになってきた。



同砂之物

花伝書を見る

砂の物　桜一色
（富春軒：初版）
桜　万年青　伊吹　柘植
苔木　樫　羊歯
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

男株と女株のバランスに軽重がなく、どちらの株にも正真と前置があるので行の砂の物である。苔生した太い幹が両株の土台となって、躍動する桜の枝をしっかりと支えている。

絵は平面だが実際は立体である。それぞれの枝の出方を思い描いてみよう。

左側、男株の苔幹はかなり大きそうだ。三方に分かれた一本の幹が前方へ傾いて出ているのだろう。直上する幹は、前から後ろへ曲がり、やや後方で立ち昇る見越の役割、その左の幹はぐいっと前方へ力強く出ているように見える。

荒々しい男株の苔幹に対して女株では株の中心に真っ直ぐ立っている。静と動の対比が面白い。

太い苔幹から別れ出た苔枝はどんなふうに出ているのだろう。男株では前に出た太い幹から左やや前方へ。女株では直立した太い幹から右やや後方へ出ていると見た。

桜の枝の立体感も想像してみよう。男株で立ち昇る真は太い苔幹に添うように一度左前方へ出てから器の真上へ戻る丸みのある形。その左後方に副が、さらに左後方へ控枝が伸びる。正真の桜は株の中心に直立している。

女株の請は立派な横枝だ。最初は右後ろへ出てやがて真横へ伸びる感じか。低く右下に伸びた流枝は株の後方から横へ、途中から前へ、最後は真横へ。この後方の請と前方の流枝で風を抱きかかえるイメージだ。伊吹にも万年青の葉にも風を感じる。

立花時勢粧の絵図は、実際に立てられたものが描かれている。その場に自分が居て見ているところを想像してみよう。

季節毎に花会を催して絵にしたとあるが、3作の桜一色は同じ時に立てたものか。立てた時は蕾だったのか。どんな場所で立てたのか。多くの人が見ただろうか。

いけばなは最先端！

仙溪

いけばな本来の魅力とは何だろう。

昨年3月の流展「花の芸術」いけばな展では大きな手応えを得られた。コロナ禍の中だったので入場者は少なかったけれど、「花が生き生きして見える」空間づくりにこだわったお陰で、いけばなが本来持っている力を今まで以上に効果的に感じてもらうことができた。

いけばなの魅力って何ですかと問われれば、その答えには色んなことが思い浮かぶが、最近特に感じているのは

自然の命を活かす芸術

ということ。シンプルだけどとても大切な、いけばなが持っている最大の特徴だと思う。

先月、他流の先生方と企画した勉強会で講師を招いてお話を聞いた。テーマは「反集中」。NPO法人「ミラツク」代表の西村勇哉さんは様々な職種・領域を超えて事業創出や研究開発を支援するお仕事をされているが、いけばなを客観視したお話を聞くことが出来た。

お話の多くはテクノロジーの過去・現在・未来について。過去のテクノロジーは予期せぬ出会いや発見が鍵となって生まれてきたが、新しいものを創造した人達に共通するのは柔らかな思考の持ち主であること。その柔らかな思考は身体感覚によるところが大きく、微妙な違いや変化を感じ取れ、我を通すことをせず周囲の変化を受け入れる柔軟さを持っていた。そういうものを育むのにいけばなはとても効果があるのではないか、というお話だった。

花をいける時、まず何も考えず手にした花を器にスッと入れて器と花の映りを確かめる事があるが、そんな時、花が意外な一面を見せてくれたりする。今まで見えていなかったものを偶然に見つける感じ。

こうしたいという気持ちが強い時よりも、花にどこにいきたいかを尋ねながらいけたほうが良い花になる事もある。花にゆだねる感覚。

考えることよりも感じることを優先する柔らかな思考が、未知の美を引き寄せているのだと思う。

花の命を相手にして、花と一緒に心地よい場をつくるいけばなは、花に新たな輝きを与える一方で、いける過程で、いけた後も、花が人に何らかの影響を与えている。

いける側が花の命を感じとり、その個性を器の上で活かすことができた時。器と花の絶妙な出逢いをつくれた時。いけた花がその場の空気を生き生きと変化させた時。いけばなの力、花本来の力、自然の力を感じる。そのような体験は人の感性を豊かにする。

固定観念に囚われず、多様なものを受け入れる柔らかな感性が、世の中をより良くする気付きや発見、出合いを生んできた。いけばなは異なる個性を持つ花々の命に触れることで、柔らかな感性を養うのに役立つ。

願わくば、これから未来を切り開いていこうとする人には是非ともいけばなを体験してほしい。無心に花と向きあっていると新たな気付きがきっとあるはずだ。その根本には互いの命を大切にする心が育まれているはずだ。

「自然の命に触れることができ、身体感覚の新たな発掘になる点で、いけばなは最先端ですよ！」西村勇哉

花をいけることは
花のいのちとふれあうこと
いのちの手ざわりが
ひとの感性をはぐくむ

『反集中』ＮＰＯ法人ミラツク編
2,970 円

22 人の起業家、経営者、研究者が多彩な視点から世界の見方を語る。

「反集中」とは、見ようとするものごとの輪郭をはっきりさせるために、その輪郭の外側を意識するアプローチ。

『反集中』特設サイトで 22 編全ての記事を無料で読める。

声と言葉のあいだ

健一郎

柊介（しゅうすけ）はよく泣き、少しずつ笑い、微妙な顔もする。よく話すようになった。というよりは、声を自分の感情に合わせて出そうとしているようにみえる。柊介の抽象度の高い声を大人たちは、好き勝手様々に言葉で解釈していく。言葉以外のものを言葉で解釈する。そんな様子を見るのは、美術鑑賞に近いものを感じながら聞いて楽しんでいる。

柊介も声を単語や意味の区切りを探しながら文節化し、自分が感じた感情をより正確に伝えようとする段階に入るのだろうか。この文節こそ、人が文化を形成したきっかけではないだろうかと言われている。柊介が言葉を覚える場に立ち会うことができるのは、大変光栄なことであるとともに、責任を感じるが、つい尊さから感じる可愛らしさと好奇心が勝って微笑んでしまう。

感情を言葉に置き換え直して言葉を話すことになる。何か物事を感じとることが無ければ言葉を使って話す必要も、絵を描く必要もない。言葉はあくまで伝えるための手段としての一つの道具である。まず、私は物事に触れ感じとる事を大切にしている。そこに在る心地よさは心地よいものだ。感じとるセンサーの感受の度合いが言葉の選びや絵に影響を与えるわけだ。柊介には言葉のない世界で感じとる力を磨いて欲しく思っている。自身や外界を言葉を用いず、感じとることができるのはこの時期の特権である。

人が文化を形成するきっかけとなった言語。それを柊介に伝える事は、世話というよりは教育に分類されるだろう。教育の始まりを感じている。言葉を話すことに初めは感情と言葉に大きなズレが生じるだろう。そして言葉を上手に使うと自分の気持ちと一致する割合が高くなる。言葉に精通している人、または感情が豊かである人ほど、正確に伝えられないもどかしさからなのか、苦しそうに見える。そのもどかしさを認めた人の言葉からは、重みと説得力を感じている。そこから言葉の楽しさは始まるのだろう。

実際に、毎月文章として考えていることをまとめているが、溢れ出てくるだけで楽しさはない。納得の上、自信満々で掲載した覚えは一度もない。それに引き換え、自分が関わったいけばなに関してはほとんど毎度自分が納得いく物である。心底自分の花が好きであり、見ていられる。思っていることが現れ出ているのだろうか。自分だけではなく植物と共に在る心強さからか。いけばなが自分に合っている気がしている。

幼少期の頃ぐらいから、祖父と考える時間が好きだった。今は考えることも好きだが感じることに熱中している。そして今、柊介も多くを感じている。柊介と考えることができる日が来るのを楽しみにしている。

桑原専慶流いけばなテキスト717号　2023年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

黄梅と松

健一郎

黄梅（木犀科）
老松（松科）
陶水盤（近藤豊作）

引き締まった格好の良い松。なかなかお目にかかることはない。どっしりと安定した松が勢いのある黄梅の枝を、一つのいけばなとして成り立たせているようにも見える。生けてしばらくしてからみると今の家元と僕の関係に似てるかもと感じた。この黄梅ぐらい動き回りたいものだ。

自分のしたいことをゆっくりと積み重ねていく。黄梅は撮影の後ゆっくりと蕾を全て咲かせ、松はいつまでも艶を保ち、美しく在った。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
4月号
No.718

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

連翹の立花

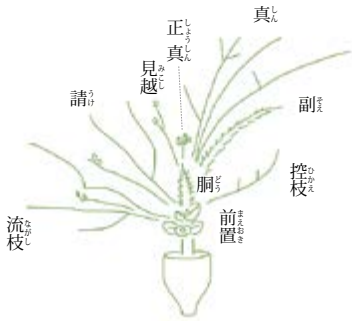
＜2頁の花＞　仙溪

連翹（木犀科）
彼岸桜（薔薇科）
貝塚伊吹（檜科）
猫柳（柳科）
椿（椿科）
菜の花（油菜科）
金盞花（菊科）

陶花器

3月中頃、私の家の周囲でも春の花木が一斉に咲き出した。白木蓮、山茱萸、雪柳、連翹、桃、少し早咲きの桜、様々な椿、名前の知らない花たち、若葉たち。枝垂れ柳も緑の筋を風になびかせて輝いている。

立花で萌え出る草木を立てた。レンギョウやヒガンザクラの細枝は1本ではたよりない。枝を重ねて存在を強めると魅力が増す。ヒガンザクラの合間にネコヤナギを覗かせると、賑やかな春が感じられる。



こころはずむ季節

＜3頁の花＞　櫻子

連翹（木犀科）
チューリップ3種（百合科）
レモンリーフ（躑躅（つつじ）科）
陶花器（宮下善爾作）

春うらら。そんな言葉がピッタリのいけばなだ。いけたのは2月の寒い頃で、いけた花に一足早い春の温もりをもらう日々だった。毎朝いけた花の水を足すのだが、花がよくもつ時季でもあり、「今日も元気でいてくれてありがとう」と声をかける。花も「にこっ」と応えてくれる。今日も頑張ろうという気持ちになる。

レンギョウは立てるよりも前へ出るようにいけることで花色が重なってくれる。チューリップは深めに挿して葉をシャキッと見せたい。レモンリーフで繁みを足した。

ビバーナムの生花

＜4頁の花＞　仙溪

生花　株分け
主株　ビバーナム（忍冬科）
ストック（油菜科）
子株　トルコ桔梗（竜胆科）
陶水盤（柳原睦夫作）

作例のビバーナム・スノーボールは弱そうに見えるけれど結構強い。3週間経った今も元気だ。優しい雰囲気を長く楽しめるのは嬉しいことである。

ビバーナムの仲間は多く、日本にもガマズミやオオデマリが咲く。スノーボールはヨーロッパ、北アメリカ原産の落葉低木で、新緑の季節に緑から白に花色が変化する。花はオオデマリに似ているけれど、花も葉もより柔らかな感じで、葉はカエデのように切れ込みがある。

トルコキキョウの青紫とは相性が良さそうだ。金の手がついた器に株分けでいけた。

ニンジンとエンドウ豆の花

＜5頁の花＞　櫻子

ダウカスダーラ（芹科）
チューリップ（百合科）
エンドウ豆（豆科）
ガラス花器（鈴木玄太作）

ポルトガルに咲く野生のニンジンの花、ダウカスダーラ。エンジ色でブラックレースフラワーとも呼ばれる。しっかりした軸のものを3本買い求めたが、それぞれに花の色も咲き方も違い素朴で優しい。

エンドウ豆も花が咲きながらも次々にサヤができて、次の日にはぐんぐんツルも茎も力強く伸びてくる。野菜の花はたくましい。

ガラスの器に足元をクロスさせながらいけてゆく。八重咲きのチューリップで春の色を添えた。

春の景色

＜6頁の花＞　健一郎

虫狩（忍冬科・連福草科）
陽光桜（薔薇科）
鳴子百合（百合科）
陶花器

どこだったか、山を歩いていると地面に花びらが落ちている。何かと探すのだが、あたりを見回しても白い花を咲かす花は見当たらない。ふと上を見上げると虫狩だ。杜若を求めて滋賀の平池を菜月と歩いていた時にもまだ花を多く残していた。写真のようなこんな景色があるのだろうか。見たことはないがどこかにありそうな景色である。桜が終わると同時に新緑に目がいくようになり、虫狩も咲く。そして杜若も満開を迎える。少しづつではあるが足と体をもって味わっている。身をもって体験するには、頭を空っぽにするのに鍛錬が必要だが、今は良い師匠が側にいる。

かわいい花

＜7頁の花＞　仙溪

イオノシジウム（蘭科）

椿（椿科）

青白磁花器（市川博一作）

このかわいい蘭は「ももちゃん」という。オンシジウムとその近縁種イオノプシスの交配種だそうだ。イオノプシスはメキシコから南米に分布する。日当たりのよい場所を好む乾燥に強い極小型の着生蘭だが、一般にはほとんど流通していないそうだ。そんな珍しい蘭を親としてできた「ももちゃん」を家の椿と一緒にいけた。

いわば遠来の客人をもてなす感覚。椿の若葉が優しく迎える。器は南米と日本をつなぐ海のイメージ。ももちゃんと比べると椿の花が大きく見える。あえて椿は一輪だけにした。

とびきりの贅沢

健一郎

息子の柊助と同じように寝っ転がり、天井を眺め母親を目で追いかけてみる。床の下で動く換気扇の音がよく聞こえる。部屋で生活している分には気にならない音だと、取り付けた業者さんは言っていたが最近になって気になるようになった。

柊介といて感じるのが自分たちの目に見えるものや、音を始めとする情報量の多さである。香水もしなくなった。久々に嗅いでみると、なんときつい匂いだったんだろうと思う。慣れは恐ろしい。匂いのほのかな植物の香りに気がつくようになった。テレビを消せば、お肉を焼く音が聞こえる。僕が不快に思うものを遠ざけているのではない。庭の沈丁花もいい香りがするが、匂いの強さから柊介と嗅ぐ際は、距離を取り楽しんでいる。

こどものいけばなでは、お弟子さんたちが生けたお花を、いけた人の目線で拝見している。子供に限らずいけられた花はそうやって見るのが当然だろう。そこにこそ、その人の世界が広がっている。グループホームに勤めてからケアに磨きをかけている中で、その人のことを少しでも知ろうとした時に自然と得た気づきだ。あたりまえの事だが大切にしたいことの一つである。福寿草、バイカオウレンなど背が低い花はできるだけ屈んで楽しむ。人のために咲いている花ではないからだ。

柊介に夢中な妻は毎日、柊介に色々なものを紹介している。ここ最近は、近辺の桜を見周っている。（今文章を書いている途中に妻から呼ばれて自室に戻ると初めての寝返りをした柊介がいた。）僕の休みの日は、週に一、二度は御所か植物園でピクニックをしている。たくさん食べ、いいものを沢山見て育ってほしいが、ゆっくりと育っていって欲しい。ゆっくりとは、段階的にという意味である。

子供が認識しやすい色は原色に近い色だとよく言われている。なのでまずは、色の濃いおもちゃを買い与えると良いとよく指導を受ける。本人からすればどういう気持ちなのだろうかは分からないが、子供が反応を示し喜んでいるのは大人である。日本の風土にあった色から徐々に慣れていけばなと個人的に思っている。部屋には桜、椿、雪柳、桃等、稽古で残ったものを柊介に見えるように飾っている。蘭や、アマリリスなどは本棚など目に届きにくい場所に飾っている。

毎日歌を歌っているのだが、主に日本の季節の唱歌を歌っている。数年前から個人的にも好きで、メロディー歌詞、共に、その季節をより、楽しまさせてくれる。日本の風土が人に創らせたとも言えるだろう。もし機会があれば世界中で歌われている「きらきら星」の各国の物を聞いてみてほしい。それぞれに言語の特徴があり、風土を感じる。その中でもインドのものはその特徴が色濃くでている。やはり母国語がその国を感じ取るのに一番適しているだろうと考えている。私は、似たものの違いがわかる繊細さに憧れを持っていて知る前を想像しようとするが柊介の眼や態度が非常に参考になる。言葉を使うことは便利だが危うく、大雑把でしかない。

柊介が産まれて数日後、岡山に住む親戚（祖父の妹）と電話する機会に恵まれた。母子を労い、無事を確認した後、「レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』はご存知？もしまだお読みでなかったら送ろうかしらと思っていたの。」とお勧めされた。数年前に一度だけ本屋さんで読んだが、過去を思い出しながら頷きもって読んだ。自然や、不思議さに驚嘆する感性を岡山の家で浴び、祖父には好奇心を四六時中刺激されて育ったのだからこんなに恵まれたことはない。そんな事を伝えると、要件は済んだのか、直ぐに終話。それが母子の健康の次に心配していた事だったのだろうか。

あまり考えたくはないが、数十年もすれば京都だけでなく街は風変わりしているだろう。どのように変わるかは知らないが、風土を感じにくくなっていると思われる。感じる力を磨かなければ気がつくことさえもできないだろう。

身体を作る食事、物事の豊かさを感じ取れる素地に関しては手を抜きたくない。そして妻も思ってくれている。ただの自分たちの考えの押し付けではあるが、良くあって欲しいとの願いからである。

「僕はね、とびきりの贅沢をさせて健ちゃんを育てるようにしているんです。」と私の祖父が他流の家元に話していたそうで、数年前にその話を伺った。ふと思い返してみると、心あたりしかない。他流の家元がどんな子に僕が育つか肝を冷やしたと仰っていた。とびきりの贅沢で育った祖父からのとびきりの影響を受け育った私。今考え得るとびきりの贅沢を息子にしようとしている。

花伝書を見る

檜除真（のきしん）
冨春軒
檜（ひのき）芍薬（しゃくやく）　松　要（かなめ）　小菊
晒木（さらしき）（吾木）

（立花時勢粧・中　雑体の図）

ヒノキが主材ではあるが、シャクヤクも主役に見える。軽やかに昇る真と、左下から大きく跳ね上がる流枝、それらを繋ぐ胴のヒノキがシャクヤクのために舞台を作っているかのようだ。後方のマツが舞台の格を高め、中央でシャクヤクが舞を舞う。

そんな想像をしていると、立花全体が一人の舞人にも見えてきた。神楽舞（かぐらまい）のイメージだ。格調高く舞う姿に神が宿る。

府立堂本印象美術館
第4回　野外いけばな展
ー私の印象ー

健一郎

堂本印象の作品から圧倒的、本物感を感じた。表現方法が多様であるのに、強い説得力を持っているのは、表現者としての感じ取る力が卓越していたからではないだろうか。

今回、大好きな蝋梅の味わい方を一から見直した。お花屋さんの協力で根っこを入手。普段、土から上しか見る事がない僕からすると驚きと愛おしさが湧いた。根を傷つけないよう職人さんが手で掘るそうだ。選んだ器は蝋梅の幹に見立てて。

蝋梅の下で寝転がっているのは気持ちがいい。お花は地面に向かって咲くので、シャワーを浴びるかのような形になる。野外展示なので、日光に透けて綺麗に見える時、雨、雪と共に在れる生け花を見る事ができたのは嬉しく思った。

鑑賞方法も指定できたらなと思ったが来場者は、マスクを外し、香りを嗅いで楽しんで頂けたのを見ると、感じている事と、感じ取ってもらえることは繋がりを持っていて、その媒介として表現がある事に改めて気づかさせられた。いい表現とは、感じた事を、できるだけそのまま感じてもらう事なのかもしれない。

やはり、印象の作品をそのままを感じ取る事ができるほどに感じ取る力が発達すれば、より楽しむ事が出来るだろう。

「円環」

健一郎

個々の惑星は本来円軌道を取り公転しようとするが、他の存在によりズレが生じ楕円軌道を公転する事になる。そして他の存在無くしての存在は在り得ない。

時間と流れの記憶を表現した作品と薮椿の反応を試みた。互いにシリーズ（品種）の原初の姿である。それぞれが、それぞれの円環で自転と公転をしながら影響を与え合っている。

「応え合わせ」展　花：桑原健一郎　陶：詹凱婷（京都精華大学）

4組の陶芸大学院生と若手華道家との交流の応え合わせ。3/10~13　karaS。

柔らかな思考

＜表紙の花＞　仙溪

シンピジウム（蘭科）
薔薇（ばら）（薔薇科）
エピデンドラム（蘭科）
陶花器（柳原睦夫作）

12月から飾っていた鉢植のシンピジウムを切っていけることにした。合わせる花を花屋で選び、家に戻って花を見ながら器をあれこれと考える。

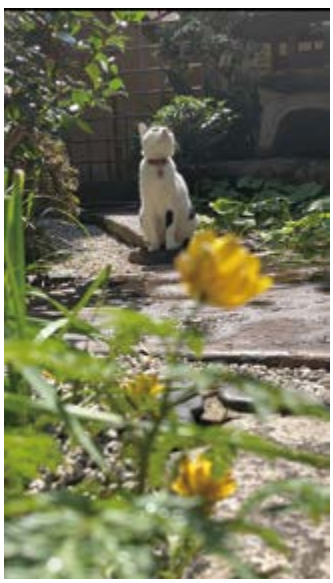
先月号に書いたが、いけばなは微妙な違いや変化を感じとる感覚を養うことに効果がある。固定観念にとらわれず、頭の中を真っ白にして、花に合う器を思い浮かべてみたらこの花器が出てきた。いけてみると新鮮ないけばなになった。あっぱれ自分、と自画自賛している。柔らかな思考のお陰である。

皆さんも、花と花、花と器の新鮮な出逢いを生み出す喜びを味わってほしい。

城南宮のしだれ梅

城南宮は平安京への遷都の際、都の南方・裏鬼門を守護するために創建され、のち白河天皇退位後の居所・鳥羽離宮の一部となって政治文化の中心となる。応仁の乱によって荒廃し江戸期に再建された。

3月10日に訪れると百五十本のしだれ梅が満開で様々な椿も咲き出していた。伸びやかに枝を広げるしだれ梅。花と人が作る景色に感動した。（仙溪）



福寿草とメイちゃん。
鳥をみつけたのかな。

桑原専慶流いけばなテキスト718号　2023年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

新緑

健一郎

イボタノキ（木犀科）
芍薬２種（牡丹科）
陶花器（幾左田昌宏作）

新緑の季節の良さを味わうようになれるのが比較的、遅かった。昔は植物にかぎらず、成熟したものや質、技術の高いものに強い魅力を感じていた。憧れだろう。とりわけ苔がべっとりとついた木瓜やクラシック音楽などと言ったものである。母がある若手のバンドを褒めていた。技術に優れているわけでもないが、なんとなく魅力的ではある。少し重たく聞こえるかもしれないが、命を削っているかのようなキリキリとしたものを感じた。不安定ながらも成り立たっている様子から、新緑とも言える魅力を感じた。余裕のなさ、一生懸命であることがそう見させているのかもしれない。

もしかすると柔らかい新緑の葉は虫に食べられまいとキリキリとしているのかもしれない。今は新緑の若さが身に染みる。季節になると街中から山を眺めいつも確認してしまう。新緑は宝である。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
5月号
No.719

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

たいせつに扱って

<2頁の花>　櫻子

山吹（薔薇科）
芍薬（牡丹科）
都忘れ（菊科）
陶花器（清水保孝作）

山吹と芍薬、この二種を満開に咲いているタイミングでいける事は中々無いと思う。

今年の春は暖かい日も多くて、いつもは固い蕾の芍薬がふっくらと手まりの様な姿を見せてくれた。

燃料や光熱費の値上がりで、去年の冬は木や草花が中々育たなくて出荷出来ないと聞いていただけに、桃や桜がいつもの時期にいつもの様な姿で出て来てくれた事は本当に有り難かった。

大切に扱っていけていきたいと感じている。

鉄線を子株に

＜3頁の花＞　仙溪

七竈（薔薇科）
鉄線2種（金鳳花科）
陶水盤

真と副のナナカマドは1本の枝で、もともとの形をそのまま生かしている。真の曲がりが低く感じたが、後から加えた枝が違和感を和らげてくれた。

残った枝を子株のテッセンの支えにしたが、居心地が良いのか、思いのほかテッセンが長く咲いてくれていた。

旬の温かさ

＜4頁の花＞　健一郎

瓜膚楓（楓科）
野萱草（百合科）
鳴子百合（百合科）
結晶釉水盤（前田保則作）

街中では見かけないが、里山にはいくらでも生えているのを見る。地元の人からすると大した喜びではないかもしれないが、街では見かけない。そして、お花屋さんで見かけるとつい、求めたくなる、野萱草。自然の池の側には瓜膚楓は実になっていた。水を感じたく水盤で生けた。感じていた情景がバック紙でよく表されている。斑が強く入った鳴子百合がまとめてくれている。それぞれが競い合うことなくそれぞれの良さを発揮していて気持ちよさそうだ。

花伝書を見る

二株砂物　太藺真
冨春軒

若による水辺の景色を見せる。山に分け入り、太藺の生える神秘的な沼にたどり着いた、

太藺（ふとい）　芍薬（しゃくやく）　松　晒木
杜若（かきつばた）　小菊　檜扇（ひおうぎ）　嫩葉（わかば）
（立花時勢粧・中　雑体の図）

冨春軒が目指した「自由」がここにも現れている。真っ直ぐ育つ太藺が曲がりつつ放つ生命力に心打たれたのだろう。数本の太藺なのだが、松の株や晒木と対等にいやそれ以上の存在感がある。

それぞれの配置の絶妙なこと。松の切株や晒木を近景にして、その向こうに太藺と杜

そんな想像をしながら眺めている。

砂の物は株立（かぶだて）とも呼ばれるように基本的に太い株が景色に加わる。立花とはまた別の表現ができるし、そこを目指さねばならない。

テマリシモツケ

＜表紙の花＞　仙溪

アメリカ手毬下野（薔薇科）

銅薄端

アメリカテマリシモツケは北アメリカ原産の落葉低木。コデマリに似た花を咲かせたあと、手毬状に結実する。

実は袋状で赤茶色に色づき、裂けて口をあけると花のように見える。このような実を袋果と呼ぶが、ユキヤナギやコデマリも似たような実ができるので、河原や公園で探してみよう。

アメリカテマリシモツケの切り枝が売られていたので、太枝からの分かれ枝を生かして生花でいけてみたが、実なのでかなり長く楽しめた。北アメリカの自然を堪能できる花材である。

京都いけばなプレゼンテーション２０２３

いけばなの日（6月6日）協賛事業

「いけばなみぃつけた」

6月3日(土)～4日(日)

京都芸術センター

出品　桑原健一郎

石黒慶知　クリス慶久

宇治市民いけばな展

会期　5月20日(土)～21日(日)

会場　宇治市植物公園

第10回 合同茶会いけばな展

2月11日(土)～12日(日)

吉野川市文化研修センター

26人出品

徳島代表いけばな展

4月15日(土)～16日(日)

あわぎんホール

2人出品

第74回　華道京展

前期　4月6日(木)～8日(土)

会場　大丸ミュージアム京都

出品作（写真①②③）

華道京展　桑原仙溪（写真①）　生花　葉団扇楓　器：阪野鳳洋

華道京展　桑原健一郎・小田部慶綾　立花／藤　松　松晒木　躑躅（つつじ）　貝塚伊吹　著莪（しゃが）　器：矢野款一

華道京展　山本慶紀・稗田慶智・掛水慶恵　麋角羊歯（びかくしだ）（葉・枯葉）　アンスリウム　器：ザールバーグ

日本いけばな芸術中国展

晴れの国この春は花の国

会期　4月12日(水)～17日(月)
会場　岡山高島屋
出品　18名（写真④～⑰）

桑原仙溪（写真④）
生花　木瓜（ぼけ）　裏白の木
器　石田和也
（備前陶心会）

岡山で15年ぶりとなる日本いけばな芸術中国展が開催された。桑原専慶流の先生方は、出品に加えて花展実行委員として様々にお仕事を担当されて、お蔭様で素晴らしい花展となった。

当流の出品作はどの花も花が主役で、花器との調和も見応えがあった。奇をてらって独りよがりになったり、技巧ばかりに目がいくのではなく、まず花の輝きを皆さんに楽しんでもらいたい、そんないけばなだったことが何より嬉しい。

私は地元陶芸家とのコラボで初めての器にいけたが、持参した花材が気持ちよさそうに花を咲かせてくれたのでほっとしている。枝物2種の生花だが、父・仙齋が好きだった組みあわせ。この絶妙な関係は生花だからこそ生まれる。

日本いけばな芸術中国展　～晴れの国この春は花の国～

小野樹仙　立花「二つ真」

松　伊吹　藤　伽羅木（きゃらぼく）　躑躅（つつじ）　空木（うつぎ）３種　海老根蘭（えびねらん）
ニオイイリス　紫蘭　小菊

上野淳泉　　立花／松　蘭

小原淡翠　立花

アンスリウム　オクロレウカ　アレカ椰子
グロリオサ　エピデンドラム　ドラセナ　ヒペリカム

小津野雅翠　立花

躑躅　小手毬　ガマズミ　花菖蒲　芍薬
著莪　夏櫨　伽羅木　斑入柾木

吉田房水　赤木雅芳　宇野民水　　八重桜　燈台躑躅（どうだんつつじ）　鉄線２色

小野京苑　石井清月　尾﨑洋風　　旅人の木　オーガスタ　百合　グロリオサ　五葉松

三近碧風　夏櫨　躑躅　杜若　海芋

宮本京泉　麋角羊歯（びかくしだ）２種　グロリオサ

中田利華　グロリオサ
プロテア　モンステラ

友延美泉　カトレア３種
ミリオクラダス　シンピジウム（葉）

原映泉　花菖蒲　石楠花　鉄線 他

石井慶月　パフィオペディルム
アンスリウム　ミリオクラダス

岡部華秋　プレクナム・シルバーレディ
アンスリウム　ジャングルブッシュ

桑原専慶流いけばなテキスト719号　2023年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

旬の強さ

＜5頁の花＞　健一郎

山法師（水木科）
河原撫子3色（撫子科）
陶花器（宮下善爾作）

河原撫子の三色と山法師、器も含めて日本で生まれたものである。取り合わせたとき、生けている時は特に気がつかず考えてはいなかった。撫子の旬の季節になると赤色の撫子がお花屋さんに並ぶ。伊勢菊と同じように花びらを垂らしたように咲く伊勢撫子なんかも出てくる。華奢で綺麗な撫子が力一杯、山法師に負けまいと咲いている。

好きな取り合わせに、撫子と花菖蒲がある。そうすると撫子が可愛らしく映る。写真は山法師と取り合わせたため競い合っているように見える。旬でなければ山法師に撫子が負けていただろう。器は撫子を応援しているに違いない。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
6月号
No.720

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

生花二種挿し

〈2頁の花〉　仙溪

灯台躑躅（躑躅科）
鉄線（金鳳花科）
饕餮文手付銅花瓶

ドウダンツツジは枝の出方が灯台の脚のようで、トウダイツツジと呼ばれたのが訛ってドウダンツツジとなったそうだ。庭や公園で育ったものを見ると、枝分かれの様子は確かに灯台を逆さにしたような姿だ。

一方、山で出合うドウダンツツジ（やその仲間）は短い別れ枝を密につけた姿をしている。厳しい自然環境がそうさせるのだろう。

この生花は殆ど撓めずにいけている。真と副は1本の枝である。副の枝は本来の副より前振りだったが、そのまま生かした。写真では見えない立体感を想像してほしい。テッセンは足元をほぐし、枝に絡めていけている。

優しい葉と花

＜3頁の花＞　仙溪

日向水木（満作科）
笹百合（百合科）
鉄線（金鳳花科）
八角染付花瓶

ミズキと名がついていてもミズキの仲間ではない。ミズキは白い4弁花が上向きに集まって咲くが、トサミズキやヒュウガミズキは淡黄色の小花が下向きに穂状にぶらさがって咲く。

ヒュウガミズキは別名イヨミズキ、ヒメミズキとも呼ばれ、花の後で小さな優しい葉を広げる。葉がしっかりしてくるころ、山ではササユリが土の中から生まれ出る。

一緒にいけてみると、両方の優しさが合わさり、とても善い雰囲気が生まれた。テッセンを加えると、ササユリのほのかな色が際立った。

優しく軽やかに

＜4頁の花＞　櫻子

デルフィニウム（金鳳花科）
アンスリウム（里芋科）
ミリオクラダス（百合科）
トルコブルー陶花器

淡い水色のデルフニウムを優しく軽やかに見せたくて、緑と淡いピンクのアンスリウムで低く囲い、ミリオクラダスで両者を繋いだ。緑色のアンスリウムがさりげなく重要な脇役になってくれている。

ライラックの季節

＜5頁の花＞　櫻子

ライラック（木犀科）
アマリリス（彼岸花科）
ガラス花瓶（コスタボダ）

海外のニュース番組を録画して、夕食の用意をしながら見る

のがほっとするひとときだ。5月19日の国際報道で、ウクライナで満開のライラックが見頃を迎え数千人のキーウ市民に休息を与えているとあった。ライラックは色も香りも素敵な花で人に安らぎを与えてくれると思う。

平和の象徴のような香り高い花。早く戦争が終結する事を願う。

レモンとメイ
みんな元気です！

孔雀檜葉の生花

＜6頁の花＞　仙溪

草型　副流し（そえ）
孔雀檜葉（くじゃくひば）（檜（ひのき）科）
煤竹（すすだけ）竹筒

クジャクヒバは檜の園芸品種で、葉の付き方を孔雀の羽に見立てた名前。寒くなると色づく品種はオウゴンクジャクヒバ（オウゴンヒバ）と呼ばれる。

枝は粘り強く撓めやすい。枝分かれが多くかなりの重量があるので、少ない本数でもしっかりした生花がいけられるが、生かせる枝は残し、余分な枝を切る判断が必要となる難易度の高い花材だ。

竹筒でいける場合、器の安定を考えるなら行の花型が向いているが、細く伸びた枝があれば副流しにもいけられる。真を充分に撓めて副との重量バランスをとる。

水際を美しくつくり、森の神聖な香りを楽しみたい。

檜の生花

〈7頁の花〉　健一郎

草型　留流し
檜（檜科）
陶水盤

空気を葉で掴むような感覚で生けたお生花。ここ一年ほどで間や空間に対しての捉え方が大きく変わってきている。花フジの一男さんが流展の私の立花をみて「次は引き算やな、でも足すのも難しいねんで。よう入ってるな。」と言葉があった。その日から空気や空間に対して興味がでた。その年の秋に鹿王院にて立てた立花の正真には何も入れないで空気をいける感覚があった。胴には檜が入っていた。そこに、枝があるわけではないが、檜の周りにはなぜか何も入れたくなくなる。檜が持つ優しく周りの空気を巻き込むようにみえるからだ。枝ぶり、空気感をより効果的に魅せられる生花の型とよく合うように感じている。

花は野にあるように

仙溪

茶道においては茶席の花について、花は野にあるように挿すことを大切にされている。

この教えは「四規七則」と呼ばれている茶の湯（茶道）の精神と心得の中の一つである。

四規

和、敬、清、寂。

七則

茶は服のよきように
炭は湯の沸くように
花は野にあるように
夏は涼しく冬暖かに
刻限は早めに
降らずとも雨の用意
相客に心せよ

これらのことは日常においても人と接する上で大切な心の持ち様だと思う。華道を志す者としても身につけておくべきことだと思うので、裏千家ホームページの言葉を参考に解説したい。

「和」とは、お互いに心を開いて仲良くするということ。

「敬」とは、お互いに敬いあうという意味。

「清」とは、目に見える清らかさだけでなく、心の中も清らかであるということ。

「寂」とは、どんなときにも動じない心。

「茶は服のよきように」とは心をこめること。（服＝服む）

舌の先で美味しいと感じることだけでなく、一生懸命に点てたお茶を客がその気持ちも味わっていただくという、主と客との心の一体感を意味する。

「炭は湯の沸くように」とは本質を見極めること。

湯がよく沸くように火をおこすには上手な炭のつぎ方というものがあるが、形式だけのみこんだのでは火はつかない。本質をよく見極めることが大切。

「花は野にあるように」とは命を尊ぶこと。

自然そのままに再現するというのではなく、野に咲く花の美しさと自然から与えられた命の尊さを盛りこもうとすることに真の意味がある。

「夏は涼しく冬暖かに」とは季節感をもつこと。

茶道では季節感を大事にし、表現する。夏なら床に「涼一味」などの言葉をかけたり、冬なら蒸したての温かいお菓子を出すなど、自然の中に自分をとけこませるような工夫を。

「刻限は早めに」とは心にゆとりを持つこと。

ゆとりとは時間を尊重すること。自分がゆったりした気持ちになるだけでなく、相手の時間を大切にすることにもなる。そのときはじめて主と客が心を開いて向かい合える。

「降らずとも雨の用意」とは柔らかい心を持つこと。

どんなときにも落ち着いて行動できる心の準備と実際の用意をいつもすること。適切に場に応じられる、自由で素直な心を持つことが大切。

「相客に心せよ」とは互いに尊重しあうこと。

一緒に客になった者同士、互いを尊重しあい、楽しいひとときを過ごせるように。

いかがだろう。茶道ではこれらの教えを大切にされているが、私たちが花をいける時、花を教え教わる時、家に花をいけて客を迎える時にも、これらのことを意識するようにしたい。

さて、「花は野にあるように」という教えを、私ははじめお茶の世界での花の扱いであって、いけばなとは別物と考えていた。

いけばなには花を活かす型があるのだから素朴ないけ方の茶花とは違うのだ、などと表面的な違いに囚われていたことを今は恥ずかしく思っている。

「花は野にあるように」とは花に対する心のありようを言っているのであって、この言葉の持つ意味は華道の神髄でもあると今では思うようになった。

桑原専慶流の流祖、冨春軒仙溪は「立花秘傳抄…立花色の事」の中で、草木の出生玄妙体を瓶にうつすことを「色」と名付け、次のように言っている。

柳は緑、花は紅。

草木を自分の心にまかせていけたのでは、技巧が気になって出生の景気は得がたい。

思いを無にして心を草木にまかせ、真っ直ぐに、横に生ずるものは真っ直ぐに、横に生ずるものは横に遣う時、草木自然の体が顕れるものだ。

槖駝曰く
「以て能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ」
（木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くのみ）

この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。

草木が本来持っている生きる働きをできるだけ損なわないようにしなさい。そうすれば自ずと草木は「命」をありありと輝き見せてくれるのだよと冨春軒は教えてくれている。

花に命の尊さを求める茶道の心と、華道の奥義はまったく同じである。

花の命を尊ぶ心を持っていたい。茶道に教わることは多い。

花伝書を見る

杜若一色　除真
桑原次郎兵衛

同

杜若（かきつばた）　河骨（こうほね）
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

桑原次郎兵衛

手が逆さまに付いた不思議な形の器によって、水辺の花の妖艶さが増して見える。

桑原次郎兵衛は才気溢れる技量の持ち主だと思う。この器も自分でデザインしたのではないだろうか。

2色の花色に陰と陽が巧みに表現されている。

初節句

健一郎

花菖蒲（菖蒲科）
祥瑞水盤

「心を込めて生けるように。」認証式の前日に家元からお達しがあった。今の時代、人の思いを花に託す事が減ってきているのではないだろうか。少なくとも私は、このお生花も含め花と向き合い生けているつもりである。まだ、思いをのせられるほどの余裕がないのだろう。控までは夢中で生け、控をどうするかで一瞬手が止まった。そして控は中高の葉組で生けた。いつの日にか追い越してほしいと心から願い、葉に託し生けた。最後の控だけではあるが、自然と心を込めることができた。夢中になると心を込める事が難しくなる。親もまだまだである。もう少し親葉を短くすれば良かったか。

永観堂に対の立花

4月22日㈮～25日㈪
永観堂（禅林寺）

浄土宗の宗祖 法然上人御忌会に際し、前机に対の立花を納めさせていただいた。ご縁を頂き15年になる。法要の2～3日前に納め、お世話はお任せしている。花物の扱いに特に気を遣うが、いつも5月の連休頃まで元気のようでほっとしている。

納める前にお堂の前で。

桑原専慶流いけばなテキスト720号　2023年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

グロリオサ×サンスベリア

健一郎

サンスベリア（竜舌蘭科）
グロリオサ（百合科）
ガラス花器

珍しい色のグロリオサが一本あった。葉は傷んでいたが花は特別綺麗だったので、葉を取り除いて花を生けた。バック紙の薄い紫色も気に入っており、淡いピンク色をよく引きたたている。近頃サンスベリアの鉢をアパレルや本屋、焼き物屋さんで見かけることが増えてきた。観葉植物の人気にも流行があるらしく、一方でモンステラを見かける機会が減ったように感じる。グロリオサもサンスベリアもアフリカに生息している植物であるからか仲は良さそうに見える。いい出逢いだった。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
7月号
No.721

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

梶の木

＜2頁の花＞　仙溪

梶の木（桑科）
透し百合（百合科）
トルソー形陶花器

カジノキはクワ科・コウゾ属の落葉高木。古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧奠」という行事が奈良時代に日本に伝わった。牽牛・織女の二星が天の川を渡って逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。

今年も七夕には庭のカジノキをいけようと思う。去年と今年とで葉の形が変わったようだ。三叉槍のような形が邪気を払い除けてくれそうだ。

なんか合うな

＜3頁の花＞　健一郎

向日葵（ひまわり）4種（菊科）
ニューサイラン2種
（ツルボラン科）
人面陶鉢（南米）

この花のとり合わせにはこのインカの器が合うなと思った。あとで調べてみるとインカ帝国とヒマワリは切っても切り離せない関係で、種を食べたり、染めや医療でも活躍し、神殿の巫女（みこ）たちはヒマワリをかたどった黄金の装飾品を身につけていたらしい。そんな深い関係があるとは知らずにこの器を選んでいたのが不思議だった。知識をつけすぎるとこういったことが無くなりそうな気もするが、そうならないように感覚を研ぎ澄ませていたい。なんか合うなを大切にしてお花をいけるのは楽しく新鮮だ。

バランスをとりながら

＜4頁の花＞　仙溪

柏葉紫陽花（紫陽花科）
桔梗（桔梗科）
スプレー菊（菊科）
結晶釉花器（前田保則作）

花屋さんの庭で育ったカシワバアジサイ。花の重さのわりには茎が細い。背の高い器に投入にしようか迷ったが、深鉢に盛るようにいけてみた。

器の底に剣山を置き、柱を4本立てて×形の仕掛けをし、その中心にもたれさせるのだが、花の重みと撓る茎との微妙なバランスを試しながらなんとかいけられた。器は鉢形だが、投入のようないけ方をしている。

個性的な花材をその枝の向くままにいけていく。そんないけ方が私には合っているようだ。もちろんこちらの思いも加わるが、花の気持ちを手に感じとりながら花と折り合いをつけている。

太藺と紫陽花の株分け

＜5頁の花＞　健一郎

太藺（蚊帳吊草科）
紫陽花（紫陽花科）
陶水盤

何本だったか忘れたが確か157本の太藺だったと思う。3、5、7…数が増えていく。その花の良さが引き出される本数で手を止める。檜扇は5本、立派な物だと3本生けると後は触らない。数にこだわり、多く生けることにこだわると、そのお花の良さが見えなくなってしまう。

柊介を寝かしつけた後、静かに薄明かりの元、ゆっくりと2日程かけて生けた。良い趣味の時間である。それから数日後、撮影の日に合わせて紫陽花を子株に加えた。

右後ろへ下がる内添の太藺が気に入っている。多少は撓めたがほとんど自然の弧である。水辺の情景。良い季節である。

裏白瓔珞の生花

＜6頁の花＞　仙溪

裏白瓔珞（躑躅科）

陶花瓶

釣鐘状の小さな花がぶら下がって咲くツツジの仲間だが、薄紅色の比較的大きな花を仏堂や仏像の装飾具である瓔珞に見立てた名前を持つ。葉裏が緑白色なのでウラジロヨウラク。

はじめて生花にいけたが、元の枝姿を生かすことでなんとか形になってくれた。

6月初旬にいけたので葉が柔らかく、枝先の傷んだ葉をかなり剪定している。7月には葉もしっかりしたものがいけられるだろう。

メイちゃん。何か見つけた！

あららぎの立花

＜7頁の花＞　健一郎

あららぎ（一位科）
檜（檜科）　躑躅（躑躅科）
陶花瓶（加藤敏雄作）

一枝の勢いを生かした立花である。新たな立花の可能性を期待した実験的な立花。花がなく、葉の色と枝ぶりに目がいく。写真で伝わらないが、実際に私が受けた印象だと、あららぎ、檜の持つ居心地のいい空気感が身に染みる。あららぎは単独で出会うことが多く、たまたまなのか、川の側で頻繁に見かける。立花は水をたっぷりと見せるのが良いが、今回は口の細い器に生けた。花器の色は水や空を連想させる。枝の持つ空気感をどう見せるか、試行錯誤の途中だが、いつか自分の感じているこの気持ちを形にできたらなと考えている。

右横から見た奥行

同

花伝書を見る

荷葉（蓮）一色　（行：初版）
冨春軒
蓮　芦　小菊
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

蓮池（はすいけ）の畔（ほとり）に芦（あし）や小菊が生えている、そんな情景が目に浮かぶ。破れた蓮の葉が、芦の勢いを際立たせている。それぞれどの方向へ出ているのか。立体を想像していると時を忘れる。流祖の時代へのタイムトラベル。

冨春軒

日本に来た満瓶 プルナ・カラサ②

仙溪

奈良国立博物館所蔵の「胎蔵図像」（①②）を見る機会があった。その巻頭にひときわ大きく描かれたハスの生え出る宝瓶の絵は、インドのプルナ・カラサ（満瓶）を連想させる。

「胎蔵図像」の原本はインド僧・善無畏によって玄宗皇帝の頃に唐で書かれている。唐の都・長安の華やぎを彷彿とさせるような華麗さを感じるが、おそらくこの壺の絵に密教の真理を描ききってあるのではないだろうか。

私の解釈では、壺をのせる逆さの蓮弁は大地、それを支える渦巻く水、丸い装飾は火、はためく紐には風、球形の壺は水であり虚空（宇宙）であり、そこからハスが生まれ出ている。

球体はガラスのようで、底にはハスの開花が映り、ハスの花から壺が生じていることを思わせる。上半分には撚り紐が巻き付くが、龍の鱗のようだなと思って見ていると、中央上部の小さな丸が龍の目に見えてきた。

8世紀初頭、どんな思いをこの絵に込めたのだろう。仏教に詳しくない私には真の意味は分からないが、じっと見ていると、私たちが生きる生命世界の静寂と躍動、内なる神秘と漲る力が感じられる。

奈良博ではもう一つプルナ・カラサを思わせる壺を見つけた。高さ約60センチの「愛染明王坐像」（③④）は宝瓶から生まれ出た蓮華の上に座る姿。現在日本で視覚できるプルナカラサの一つだと思う。

①

②

「胎蔵図像」（1194）には密教の世界観が絵で表されている。円珍（814~891）が唐より持ち帰ったものの転写本で、その元絵はインド僧・善無畏（シュバカラシンハ637~735）が『大日経』を漢訳する際に描いたとされる。善無畏は中部インド摩伽陀国の国王で、出家後ナーランダー僧院で学んだ密教を唐へ伝えた。

出典①～④:奈良国立博物館「奈良博三昧至高の仏教美術コレクション展」

③

④

「愛染明王坐像」奈良・興福寺伝来。木造 彩色 截金。高さ約60センチ。鎌倉時代。明王が坐す蓮華を生み出すこの壺（宝瓶）も、生命の母胎としてのプルナ・カラサ（満瓶）のイメージと重なって見える。

花火のような

＜表紙の花＞　櫻子

蚊帳吊草（蚊帳吊草科）
紫陽花（紫陽花科）
額紫陽花（　〃　）
「墨田の花火」他
手付ガラス花瓶

倉敷の岡部先生から、時々家で育てたお花をいただくのが楽しみの一つになっている。

萎れない様に丁寧にお水を当てて袋に入れて持ち帰らせてくださる。6月は色んな紫陽花や山野草を頂戴した。

オタクサアジサイ、スミダノハナビ、ダンスパーティー、ウズアジサイ、ガクアジサイ、ヤマアジサイと名前が添えてある。全部アジサイ。一番きれいな花を切ってくださったに違いないと思う。

早速撮影させていただいた。

夏の夜空に打ち上げられる花火のようなカヤツリグサと名前に花火がつくアジサイ。

6月6日はいけばなの日

京都いけばなプレゼンテーション　6月3日～4日　京都芸術センター

6月6日はいけばなの日
京都いけばなプレゼンテーション

山法師の生花

健一郎

山法師（水木科）
陶花器（近藤豊作）

この生花は山で切らせてもらった枝でいけた。高く生える、数種類の山法師の中から一番惹かれた枝に鳥の巣を「みぃつけた」。鳥はすでに退居されている。近くで見ると良いものである。ほかにもカタツムリが乗っていたので紫陽花の葉の上へ。豊かな自然の中の贅沢で思い入れのある特別な生花だ。

柊介は寝返りを覚えました。
離乳食にも慣れてきました！

庭のムクゲが花盛りです。
左の底紅は「宗旦」。右は「祇園守り」の薄紅種。シベの姿が祇園守紋に似る。祇園祭には「白花祇園守」が神前に供えられる。

桑原専慶流いけばなテキスト721号　2023年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

テッセンの実

＜12頁の花＞　櫻子

ベル鉄線（金鳳花科）
鉄線の実（〃　）
京鹿の子（薔薇科）
陶花瓶

不思議な糸の玉のようなものはテッセンの実で、花のあとにできる多くの花柱が伸びた姿だ。このあとしばらくすると花柱の一本一本が綿毛で覆われて毛玉のようになる。それぞれの付け根には果実（痩果）があり、いづれ乾燥すると風に乗って飛んで行く。

テッセンの花がこんな実に変化することに最初驚いたが、どんな花でも、可愛い新芽の姿や不思議な実の形を知ることで、その花とのつながりが強くなる気がする。できるだけ外へ出て、植物のいろんな姿に触れたいと思う。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
8月号
No.722

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

軽く涼しく

＜2頁の花＞　櫻子

デンファレ・白色（蘭科）
蘭「さくら」（蘭科）
胡蝶蘭（こちょうらん）・オレンジ色（蘭科）
雪柳（薔薇（ばら）科）
ガラス花器（ヨーラン作）

ガラスのかたまりの様な重いガラス器。6キロの重さなのでしっかり持たないとすべり落としてしまいそうになる。

スウェーデンのコスタボタからよく持って帰って来れたなと花をいける度に感心する。

そんな器でも花は軽やかに飾りたい。

ユキヤナギを折らない様に慎重にためてランの花に添わせて垂れ下げて、空間を作りながら軽く軽くしなやかに。

ガラス器の中に茎を見せない事も涼しく感じる要素になると思う。

南米パンパ平原

＜3頁の花＞　仙溪

パンパスグラス（稲科）
向日葵（ひまわり）（菊科）
舟型陶花器

パンパスグラスの故郷、パンパ平原は、アルゼンチンの首都・ブエノスアイレスを中心にした半径約600キロの半円形の地域。起伏のない広大な平地で、関東平野の約60倍の大きさがあるという。

そんなところで育つパンパスグラスは強靱で雄大。細くて硬いノコギリのような葉を持ち、大きな花穂が高く立ち昇る。

作例のパンパスグラスは花穂が既に出た状態だったので、大きな花穂を主役に立てて足元にヒマワリを集めた。濃い色のヒマワリを多めにいけると、花穂が輝いて見える。

朝鮮槙の生花

＜4頁の花＞　仙溪

生花　草型　副流し

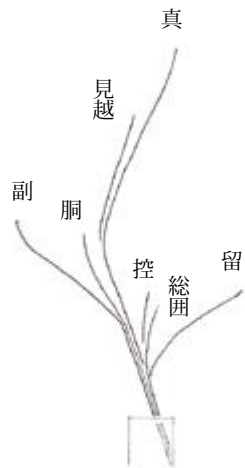
朝鮮槙（犬榧科）

煤竹竹筒

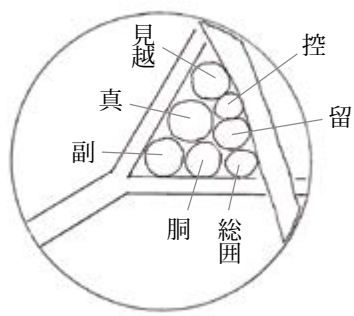
チョウセンマキはイヌガヤの変種から作り出された園芸品種で、日本にも朝鮮半島にも自生は無い。日本固有の栽培品種である。

真夏でも長持ちするのが有難いが、こまめに水を入れ替えたい。

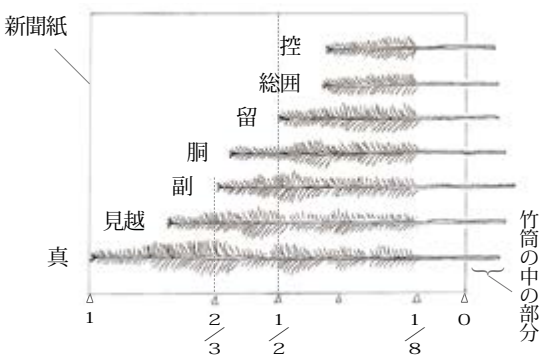
◎行の花型



又木配りのかけ方と役枝の場所（あくまでも一例として）



それぞれの枝の長さは左図のように新聞紙を基準にするといい。



お盆のお生花

＜5頁の花＞　健一郎

生花　草型　留流し
高野槙（槙科）
陶水盤

去年のお盆に合わせて手に入った高野槙をお生花にして撮影した。その後飾っておいたが、お弟子さんが「お盆で帰り損ねた方がこれでお帰りになれますね」と呟いていた。自分は衝動で生けていたのでその言葉が身に沁みた。見てもらえる環境があること、人がいることは本当に有難いことだとも感じた。

高野山の金剛峯寺に2年前、千住博画伯の『朧図』、『断崖図』を見に行った時に古木の高野槙を見て、その風格に圧倒された記憶がある。お盆用に出荷される高野槙は仏花になる際に真っ直ぐに生えたものが都合良いらしい。高野槙独特の葉が面白いが、留などの横枝を探すのは難しい。大きな枝を見つけたのでなんとか形になった。

苔躑躅とのお生花

＜6頁の花＞　健一郎

生花　二種挿し
霧島躑躅（躑躅科）
鉄線（金鳳花科）
ガラス鉢

苔躑躅はほとんど撓めることができない。どれほどの年月、どのような環境の中にいるとこうなるのだろう。この面白い枝ぶりを生かそうとお生花を選択した。お花屋さんで枝をみると、どうもお生花にはなりそうにない。格好にならなければ、魅力に感じた枝ぶりが見える投げ入れにしようと考えていた。家に持ち帰り、時間をかけてじっくりと見た。水につけたまま30分は眺めていただろう。見応えのある格好のよい躑躅だった。多少枝を捻って格好をつけてはいるものの、ほとんどそのままである。よくこんな躑躅があったものだ。鉄線を絡め、涼しげに。

一滴の滝

＜7頁の花＞　健一郎

松（松科）
鬼百合（百合科）
桔梗（桔梗科）
千手岩菲（撫子科）
石
陶水盤

松の一年を見ていると面白い。堀川通りや御所によく出かけるので少しずつの変化を楽しんでいる。見ているだけでも良いものだがやはり生けてみると、また違った味わい方ができる。今回はお花屋さんで勢いよく伸びのある幼い松をもらってきた。普段見ている景色とは違うが、珍しい山野草とともに生けた。すると石の風景が浮かんだ。撮影の直前に石に一滴水を垂らした。山間に滝をみている。こんなことをしているのも良いものだ。豊かな遊びの時間である。

同砂之物

花伝書を見る

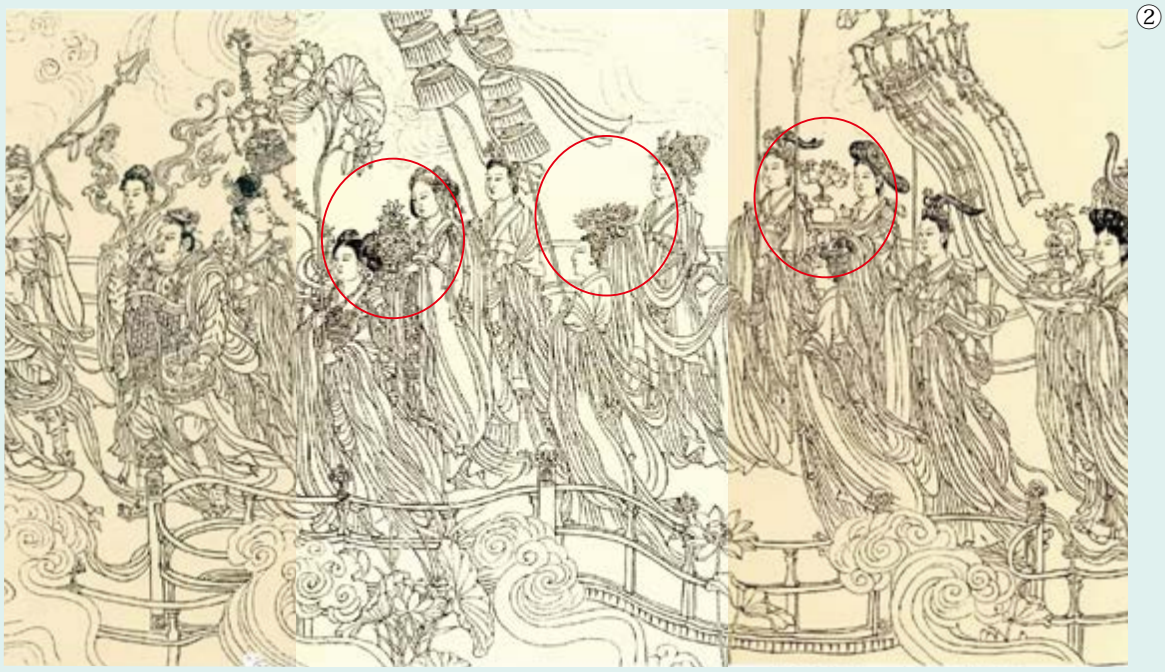
荷葉（蓮）一色（砂の物：初版）
寸松軒（初版：冨春軒）
蓮　蒲
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

横に広い口をもつ砂鉢に立てる「砂物」は、おのずと横広がりの姿となる。この蓮一色砂の物も、まるで目の前に蓮池が広がっているようだ。

男株と女株に軽重がなく、一株の砂物を左右に分け広げたように立てられている。両株の正真、胴、前置の景色を変えることで、自然な景色の繋がりを見せている。

2つの株を1つに合わせた姿を想像してみてほしい。正真から前置にかけての景色に何の不自然さも感じない。

脇役的な存在だが、両株の間の後方に見える巻葉が、この砂の物の要のように感じる。



「八十七神仙巻」の元絵は呉道玄（初名：道子）作と伝わる。道教の神仙たちが３人の皇帝と共に天上界を歩む。徐悲鴻記念館蔵
出典①：澎湃新聞 https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_2051721　②～⑥：澄境芸術 http://www.cjxysw.com/pd.jsp?id=40

唐王朝の挿花

仙溪

呉道玄（生没年不詳）は８世紀、唐の玄宗皇帝に仕えた画家で、その天才的な筆致には神が宿ると評された。宮殿、寺院、道観などの壁画は現存しないが、彼の作と伝わる絵から唐王朝における花の文化を想像してみたい。

「八十七神仙巻」（図①～⑥）は３人の皇帝が天上の橋を仙人や神々と共に進む場面が描かれている。従者は様々な楽器や供物を手に持っているが、蓮や菊、その他の花の供花（だと思う）も多く描かれている。⑥盤に花を盛ったもの、⑤ガラス鉢に花を養ったものに加えて、③④花を挿した器を持つ姿も多く見られる。

「送子天王図」（図⑦）は仏教の絵で、釈迦牟尼仏降誕の故事が描かれている。その中に壺を持つ女性が描かれているが、壺には蓮の葉ほか（蓮花？）が挿されている。

これらの挿花が何のためのものか断定はできないが、唐の玄宗皇帝の時代（712～756年）、すでに挿花は行われていたと想像できる。少し溯ると武則天の時代（690～705年）がある。女帝のもとで花の文化が花開いたか。

日本人が憧れ持ち帰った唐の文化。その中に供花であれ何であれ、花を挿す文化もあったのかもしれない。

「送子天王図」の元絵も呉道玄作と伝わる。
大阪市立美術館蔵　出典⑦：鳳凰新聞 https://guoxue.ifeng.com/c/88KWa1cVrZk

ある不思議

健一郎

エコーで確認していた頃は3ミリだった息子の柊介が7ヶ月が経過し、6kgを超えるようになった。本当に大きくなった。

グループホームでの利用者さん達は体重の増加はあれど、ここまで大きくなることはない。私がグループホームの生活の中でかける言葉のうちに、いてくれてありがとう、生まれてきてくれてありがとう。といった類の言葉は日常的に口にしていたのだが、子供に対して、この類の気持ちをもちながら「どうやって大きくなったんや？」という言葉が口から出たのが新鮮で幸せな気持ちになった。彼に残されているであろう時間と、大きくなるであろう心身の事を思えることは、私にとって新しい体験である。

自分の子供が生まれる前に想像していたほど、子供に対して特別な気持ちを持つわけではなかったことにも驚いた。子の誕生は静かに暖かく豊かである。似かよった感覚をグループホームで人と関わりをもち、生活することで気がついた。そして、マンチェスターで植物の命について考えるきっかけがあったことも、大きく影響しているだろう。子の誕生も同じように特別だと感じた。だが、大きくなる事への驚きは子育てならではだろう。

かくいう私も大きくなった1人である。幼年の頃は幾度となく人に会うたびに「背伸びたね」「また大きくなったな」と声をかけられたものだが頭の中で子供が大きくなることは知っているはずなのに、当たり前のことに対してなぜ驚くのだろうと不思議に思っていた事があった。「ちっちゃなってたまるか！」と言い返すことを隣で勧めていた祖父を思い出す。

子に恵まれてから「ある」という事に対して不思議な気持ちを持つことが増えた。物があるとはどういうことなのだろうか。絶対的な1が存在するのかという問いが立った。調べてみると目に見えるものは様々なものが関係しあってできているらしい。それを分解し、細かくみていくと、原子や分子といったナノサイズ（1メートルの10億分の1）あるいはそれよりも小さな世界の話になるそうだ。もちろん肉眼で確認することは叶わない。

今、結論とされているものから述べると、絶対的な個といえるものは存在しないらしい。すべてのものが何か別のものへの対応だけで成り立っているという。電子が一切の相互作用をしていない時、その電子には物理的属性がない。位置もなければ速度もないのだ。明確な属性を持つ互いに独立した実態ではなく、他との関係においてのみ、さらには相互作用した時にはじめて属性や特徴を持つ存在となる。つまり実態とは永続的なものではなく、その場の環境によって姿形を変える束の間の出来事なのである。全ては相互作用で実態というものがあるように見えているだけだということだ。

物事が物事に作用を及ぼす。例としては、狼が人の脅威である→人が狼を根絶させる→鹿が増える→鹿が草を食べる。→森林が荒廃する→人が狼を再導入。以上のようなことも相互作用していたんだなと再認識させられるような例だ。まあ、大風が吹けば桶屋が儲かるようなものである。多様性の上でお互いに影響を与え合いながら実在が保たれているようにみえ、関係が発生しなければそこには在ることができない。そこには、その時々に在るという奇跡の瞬間がある。

食べる、食べられる関係は一見、弱肉強食のヒエラルキーのように見える。だが、同じ生存空間を分かち合い、互いに他の種の数を調整しながら、共存する関係を結び合っているのだ。結果的に一種類の生物がその場を独占するよりもはるかに多くの生物量が存在でき、より多くの種類が、物質とエネルギーの循環も促進され自然の円環が保たれるらしい。

物が存在し続けると勘違いしてしまった生物は、物が無くなった際に不思議に思う。柊介は手に持っていたものがなくなるとそれを切なげに見つめて不満そうな顔をする。少し前までは目の前からおもちゃが無くなることもそのまま受け入れていた。子が大人になるのは思っているより早いのかもしれない。

お花が枯れるということを知っている人はそれを不思議に思わない。そういうものだと知っている。枯れると実がなることを知っている。人は人の一生の時間を軸に、時間について考える。切花の寿命は数日である。そこに人自身の生涯の縮図を投影し、ある事の奇跡を確かめ、散ることを不思議だと思わなくしようとしたのではないだろうか。人が切花を楽しむようになるより遙か昔、ヒトが弱肉強食の中にいた時に感じていた、生きている奇跡をである。

自身が偶然に今、姿形としてあるように思えるだけで、無いという状態を当たり前の事として、受け止め、ある事を前提に生きるのと関係性の上で一時的に現れ出ていることを前提に生きるのでは大きな違いが出る。切花はその状態をよく表しているように思える。

切花は枯れる。来年にもう一度お花を咲かすことはない。土から切り離された状態である。私はこの状態が不思議な、一種の神秘的な状態でもあるように思う。

花を生けることは、人がヒトでいるために大きなきっかけを創ると考えている。

お釈迦さんは、この世にある形あるものは、この世に永遠に存在する唯一絶対的な存在のものではなく、あらゆる因縁によって生まれているという事も唱えていた。

在る事は無いことにできない。無いものとして考えた時点でそれは在る。たまたまの偶然を楽しみ、そこでは良い、悪いは大きな問題ではない。日々、奇跡の瞬間を生きている。

アーティチョーク

＜表紙の花＞　櫻子

グラジオラス（菖蒲科）
アーティチョーク（菊科）
瑠璃玉薊（菊科）
金彩ガラス花器
（ウルリカ作）

アーティチョークは古くから栽培され、古代のエジプト、ギリシャ、ローマ時代にすでに食用や薬用として利用されていた。

モロッコでいけばな展のため花材採集した時も野生のアーティチョークが沢山道沿いに生えていたが葉先や茎、苞にチクチクする小さなトゲがあり、とても手こずったのを覚えている。切ってすぐ水揚げしても萎れてしまい短くしないと生けられなかった。

そんな事を思い出しながら、花屋さんで買ったアーティチョークを長く生けている。野生の強靭さは無いけれど、立ちあがる薄紫色の花が繊細で美しい。大きなタンポポのよう。同じキク科のルリタマアザミを添えて色の濃淡でグラジオラスの色を引き立てた。

レモンとメイと檜扇

「テキスト」10年分公開

「桑原専慶流いけばなテキスト」は1962年に始まって61年目になる。長きにわたる流内の皆様のご支援に厚く御礼申し上げます。

そんな蓄積を活用してもらいたくて、2012年まで50年分の花の写真と解説文をホームページに公開したのが3年前。誰でも何時でもご覧頂けます。

先々代、先代夫妻、そして現代。それぞれの花と文を見比べることもできます。月ごとにまとめてもあるので、ある季節のいけばなだけを眺めてもいただけます。

そして今回、その後の10年分も公開することにしました。年順、月順にまとめたものに加えて、仙溪、櫻子、健一郎それぞれの花と文を個別に見ることもできます。

また、「立華時勢粧を読む」の連載と、随時連載中の「器と花の痕跡」もまとめておきました。これらは自分自身が振り返るのに大変役に立っています。

流派のいけばなをまとまった形で記録に留めることができて感無量です。

これからも流派の皆さんのため発行を続けていきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

https://kuwaharasenkei.net
→「書籍・月刊誌」
→「桑原専慶流いけばなテキスト（2013~2022 年）」

桑原専慶流いけばなテキスト722号　2023年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

深山の気

<12頁の花>　仙溪

櫟（櫟科）
夏櫨（躑躅科）
山紫陽花（紫陽花科）
陶花器

アジサイの季節が過ぎて梅雨も明けた頃、京都では祇園祭山鉾巡行が無事に執り行われた。古から厄除けの力を持つとされる檜扇（古名：烏扇）をいけて飾るのも古都の歳時記である。

そのあとは真夏の太陽が容赦なく照りつける。庭のムクゲも花数を減らして暑さに耐えている。床の間には清流や滝の絵を掛けて、奥山の涼風を感じたい。

イチイの幼木に色づいたナツハゼを重ねて、その足元にまだ色の残るヤマアジサイを覗かせた。真横へ長く伸びるヤマアジサイに出逢ったことからとり合わせを考えたが、深山の気を感じる花になった。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
9月号
No.723

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

七竈の赤い葉

＜2頁の花＞　仙溪

七竈（薔薇科）
秋明菊（金鳳花科）
瑠璃虎の尾（胡麻の葉草科）
陶水盤

青葉に赤や黄に色づいた葉が混じっているのを「わくら葉」と呼ぶ。信州の森で撮った写真にも写っていた（左）。虫などによる自然現象だが、この仕組みを利用してナナカマドの切り枝を人工的に紅葉させることができる。作例の盛花は真夏にいけたが、一週間以上元気だった。自然では実の方が葉よりも先に赤くなるので見分けがつく。

横から見た奥行

蓼科で8月24日撮影

夏の収穫

＜3頁の花＞　櫻子

鷹の羽薄（稲科）
粟（稲科）
透かし百合（百合科）
ズッキーニ（瓜科）
アケビ手提げ籠

今年の夏も厳しい暑さだったが、旬の果物や野菜は沢山売られていて毎日煮物、漬物、炒め物、サラダ、ナムルなどを作っては食べていたので夏バテにもならず健康に暮らす事が出来た。

お弟子さんから畑で育てた巨大なズッキーニをいただいたので、アワの若い穂とアケビ籠に取り合わせた。

昔はこのアケビ籠で錦市場に買い物に通っていた事を思い出す。今は荷物が多くてリュックに代わったが。それでもこの籠を見ると沢山の花を盛り込みたくなる。

アワ、スカシユリ、ズッキーニ（入らない！）、重く見えてはいけないのでタカノハススキをいけて。

流木・晒木

＜4頁の花＞　仙溪

胡蝶蘭2種（蘭科）
棕櫚竹（椰子科）
蝋梅の根塊
ガラス花器

この塊はロウバイの根と聞いている。何とも味わいのある形だが、ここまで特殊でなくても、流木や晒木を園芸店などで見つけたら、気に入った形のものを手に入れておくといい。

作例の白い蘭は鉢植で買ってきて根を洗って根つきでいけている。剣山に立てた支えに括っているので剣山を隠すものが必要になる。そこで流木などが役に立つ。自然でもコチョウランは木や岩に根を這わせて咲いているので、良い景色をつくってくれる。

庭のシュロチクの若葉を加えて、黄色いガラス器にいけた。南の島のイメージ。

女郎花

＜5頁の花＞　櫻子

女郎花（女郎花科）
スモークグラス（稲科）
薔薇数種（薔薇科）
陶花瓶（竹内眞三郎作）

初秋の明るさをいち早く感じさせてくれるオミナエシ。敗醤という別名（生薬名）があるのは、花が古くなると醤油が腐ったような匂いがするからだ。でもそんなことはお構いなしに、いつも秋にはオミナエシを楽しみに待っている。

いける時に気をつける事は

① 出来るだけ風通しの良い場所に飾ってあげる事。

② 水をこまめに替える事

③ 長くて軸の太いものを選べば、1、2本でも存在感があるので少ない本数で他の花と取り合わせる。

絶滅危惧種にも指定された花なので、今手に入るものは殆どが栽培種だが、秋の七草として長く飾ってあげたい。

バラ農園で咲きはじめた夏バラと合わせて。

二重切りの生花

＜6頁の花＞　健一郎

上溝桜の実（薔薇科）
竜胆（竜胆科）
二重切竹筒

青い葉の雪柳と竜胆で二重切りに生けて飾っていたが、雪柳の葉が散り、撮影用に上溝桜を生けた。印象がまるで変わり、竜胆の見え方と季節が変わった。選ぶことができたら煤竹の二重切りに生けたいところだが家にはない。ないものを思えるようになったことも一つの成長ではないかと思っている。だが白竹の映りも軽やかで、上溝桜の実が熟す時期の早さを考えると、これで良いのではないかと納得している。

乱れ桔梗立花

＜7頁の花＞　健一郎

桔梗2種（桔梗科）
仙翁（撫子科）
沼虎の尾（桜草科）
萩（豆科）　流木
青磁花瓶（清水卯一作）

仙翁とともに、桔梗の蕾、花、実、茎ぶりを見て好きなものを花フジの山で切らせてもらった。生えているところを知っていると生ける時にも影響が出る。少し前までなら役枝のイメージを思い描いてお花を選んでいたが、ここのところは面白いものをすぐって頂いている。当初は花瓶を前にすると困ったが、そのお花に惚れ、観察していればいつの間にかどうにかなるものなんだと思うようになった。

正真の沼虎の尾は花フジのとし子さんが福井県から持って帰ってきたもので、良い景色になりそうだったのでそのままいただいた。

ヒトと人

健一郎

柊介が産まれてからずっとそばにいる。オスとして些か奇妙な行動をしている事は認識していており、むず痒さもある。頭では外へ出て狩りにでも出かけなければいけないとは考えているが、育児休暇という制度を使って今も柊介の側にいる事ができている。

共に過ごす時間は、なんと幸せな事か。妻に怒られながらではあるが、そばにいる事を許してもらっている。妻は母として自立し、以前よりも逞しさに拍車がかかり、安心できる。すくすくと育つ時に気をつけたいと思っているのが環境である。言葉、規則、慣例から程遠いところでゆっくりとしてから、自分のペースで人間の生活を楽しんでもらいたい。これが僕の考える、とびきりの贅沢だ。

ここ最近は、霊長類としてのヒトの機能的な事柄に興味がある。柊介を迎えるにあたり、調べ物は一切していない。反応をそのまま楽しんだ。今は新生児期が過ぎたのでこの期について調べてみるとおもしろかった。新生児には様々な原始反射が見られる。例えば産まれてまもない赤ちゃんも哺乳反射というものをもっている。赤ちゃんの口に入ってきたものを吸う反射能力だ。母乳を吸うのに大切な反射だ。出産後すぐに授乳していたのには驚いた。そして、掌に物が触れると握りしめる、掌握反応もその名残の一つである。今の赤ちゃんには必要でなく、一般的に3〜4ヶ月で自然に消滅するらしい。体毛があった頃に必要だった反射の名残で、赤ちゃんは親の体毛につかまるためという説を見て納得した。

毛は森の中で体温を保つのに役立ち、暑い時は熱から身を守った。人は毛を失い、気候が変化し、動物の生息地が変化した結果、我々の祖先はサバンナに移り住む。二足歩行を始めた。直立二足歩行により、脳を下から支えられるようになったので脳を大きくすることができた。太陽にあたる面積が少なくなり、目の位置が高くなったので遠くを見渡せるようになり、エネルギー効率も良くなった。前足は道具を使うものに役目が変わり、多くの食べ物を一度に運べるようになった。そしてそれぞれの事柄は互いに影響しあっている。

なぜ人は重い赤ちゃんを産むのか。脂肪率は類人猿の五倍である。その脂肪は脳を作るためのものらしい。新生児の脳は三段階で成長するという。1年で2倍、5年で大人の90パーセント、12歳から16歳で完成するそうだ。その一つに類人猿に見られる食物分配が注目されている。人間はその場で食べずに持ち帰り仲間と分配し、共に食べる。そして見えない物を欲望することができるようになった。速力の劣化、俊敏性の減退、木登りの能力と消化能力を減少させ、共感力増加に基づく社会力を選んだ。長距離歩行、器用な手、食物の運搬が共感力に作用しているらしい。そして共同での子育ても促すだろう。それらは互いに影響しあい脳の大きさにも影響を与えていると思われる。

狩猟を行うようになり、走ることを覚えた。体毛を失ったことが功を奏し、汗をかき運動をする生活様式になる。残った髪の毛は熱の持ちやすい脳を冷やすために生えている。ヒトは他の類人猿と比べても多くの汗腺を持っているため、十分な体温調節をすることができる。体を動かす欲求も多くの汗腺が作用しているからかもしれない。

先週るり渓の滝を見に行った。柊介はまだ近くで感じているだけだが、いつか一緒に飛び込みたい。裸足で水の中に入っていると度々足の裏を切る。そのたびに人が川や海での生活に適していないんだな、と感じる。木にのぼったり、ぶら下がったり、身体を通して自分が自然の中での生活に適してはいないことを実感する。ヒトは自然の中での生活から離れて久しい。昨日は蓮を切りに沼地に入り肌が露出していた箇所が他の葉で切れていたりした。泥だらけだったがそのまま新幹線に乗り帰るのは気が引け、着替えてから帰った。

我々の祖先も、家の猫も恐怖を感じたら、毛が総立ちになる。体を大きく見せることが意思表示にもなる。この毛を立てるための筋肉はヒトにも備わっていて、我々は鳥肌を立てることができる。衣服を纏いほとんどの毛が減少した。今の生活様式に必要な反応ではないが身体に残っているものの一つで、他にも尾骶骨も尻尾の退化したもので、いずれも自然の中で生活していた名残である。蓮池の蓮も先祖返りして白い蓮、八重の蓮、一重のものなど様々であった。尾骶骨（びていこつ）の生えた人間が生まれることもあるそうだ。地球は遠い時間と生物の面白さで満ち溢れている。研究する気にはなれないが、見たり聞いたりするのは好きだ。

霊長類の中でもゴリラやオランウータンなども含む類人猿は早期に顔の毛を失ったという。表情を使って我々は意思疎通をしていることがその原因としてあるそうだ。その中でも目の情報は非常に大きい。目に関する慣用句や諺が多いのもそのためだろうか。人に関して言えば視覚からの情報が8割ほどであるという。そして相手の目からも多くの情報を得ている。人は人の中で生活するにはたくさんの人の顔から無意識に自分の行動を決めてしまっているのかもしれない。産まれた頃から柊介を見ていても人によってコロコロと態度をかえ、7ヶ月を過ぎると、相手の喜ぶことを探して何かをする仕草が増えたように思う。大切なことだが一方で自分の世界の中に入り込めるような環境作りも夫婦でしている。今日も妻が洗濯物に夢中になる柊介の動画を見せてもらった。良い表情である。多少危なかろうと、本人の主体性を守り、没頭できる場を作れる母親は本当に凄いと思う。

人以外の動物は絶対音感を持っているらしい。言葉を解釈する上で音程は重要視されず、一音一音の意味が大切になる。音程に気をつけて話を聞くと、

言葉が聞き取れない。自然と絶対音感は崩れていく。音楽に携わっていると、その感覚が衰退することを止めることができるのだろうか。音楽に携わっている人に絶対音感を持っている人が多い。

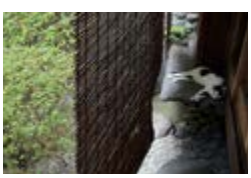
音階は音を記号化したものである。一方でノイズともいわれる音達も存在する。ノイズも音階に当てはめることもできるらしいが、無理に音階に当てはめなくてもいいのではないかと思う。言葉に関しても話す言語からはみ出た言葉は、ただの音である。

幼児教育の世界ではよく、「ぴちゃぴちゃ」「ざあざあ」などのオノマトペの効果が期待されている。言語の中ではまだノイズに近いから注目されているのかもしれない。言語とただの音の間にあると思っている。言葉以外の音を口からも出すように心がけているのだが、これが難しい。ヒトとしての感覚に磨きをかけたい。

たくさんの音に囲まれて、汗をかくことを楽しみ、脳を充分に使って考え、人との関わり合いの中で自立をし、精神的に豊かな生活をおくり、善く生きて欲しい。些か願いすぎか。自分も目指すところである。

岡山・流枝会で蓮の立花

華老の上野淳泉先生指導のもと、今年も早朝から蓮を採って立花を立てられた。右の写真は健一郎が立てたもの。なかなか味わい深い蓮一色だ。　仙溪



真夏のメイとレモン

水の景色

＜表紙の花＞　健一郎

匙沢瀉（沢瀉科）
水葵（水葵科）
縞芦（稲科）
煤竹肩切魚籠

お弟子さんが花展で他流の水辺の景色生けを見て、「僕やったらあそこに竿投げたいですもん。」とか思っちゃいます。」と言っていたのを記憶している。僕にはできない見方である。それだけ実際の景色のポイントを絞って抽出した面白い物だったのだろう。

今回水辺の景色を生けるにあたり、水盤で生けたい気持ちをグッと堪え、魚籠での投げ入れを試みた。人と水辺のの情景である。釣りの好きな義父さんによく琵琶湖に連れて行ってもらう。慣れれば距離は近く感じるようになった。山ではなく湖の植物たちを見ることができるのも面白い。ボートで好きなところに連れて行ってもらいゆっくりとした時間を共に過ごしている。

オモダカは頭が重く固定が難しかったので足をつけている。銅の落としに配りをかけるとすぐにお花が止まった。オモダカのお花が小さく可愛らしい。

徳島に訪れて

健一郎

徳島の気候で育った力強い花々と機転と場を巻き込み、確かな技術が見られた気持ちの良い花会だった。様々な文化と花があるのも良かった。武田先生と50年伴走した企画の藤原さんからお話があった。

「家に上がるとな玄関にお花が飾ってあって上がるとお床があってお軸がかけてある。その横の違棚には壺が飾ってあってな。全部で一つの作品になっとんよ。やけん、そんなふうに会場の設えもできたらって思ってみんなで形にしたんよ。ほでな、展覧会とかなよくやってるけどな、お花がないとあかんのや。生きてるもんがこう繋いどるからかな？絵とかでも抽象的であったらあるほどこう、入れんのや。やけどなお花が繋いでくれんねん。器だけでもな、あかん。見たことないお花でも見たことあるお花でも関係ないんよ。」

本当にそうであるか私が判断できる事ではないが、伺ったことに覚えはあった。言葉に時間の重みと強い感情を感じた。その人の力である。

花展を楽しんだのち、武田慶園先生の娘さんとお孫さんに徳島のほんの一部を紹介していただいたが、訪れた各箇所で文化の匂いを感じた。次回はゆっくりと周ってみたい。

お孫さんは私と同じ歳で好奇心が強い。矢野陶園さんで見た置き物を見て、「可愛い。」と楽しんでいた様子に心が和んだ。純粋で真っ直ぐ。それは健康的でとても良い入り口だと思う。作家の名前や名品と呼ばれたものにしか興味がないのとは対極にある。好意の感情から、見立てるきっかけが芽生え、それぞれの文化が実生活に溶け込んでゆくのだろうか。様々な発見があった徳島の一日だったが多くの方にあたたかく迎えられ、初対面の方ともなぜか懐かしさを覚える時間を過ごした。

同

花伝書を見る

菊の一色（行：初版）
冨春軒
菊　小菊
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

一色物には独特の雰囲気がある。過去に見た景色と重なる感じ。他の立花と比べて、より自然な印象を強く受ける。冨春軒の一色物は正にそこに生えているようで、人の手を感じさせない。

そう感じるのは何故だろう。おそらくどの花にも強い個性がもともと備わっているからだろう。風に倒れてもそこから立ち上がる姿。土の中にしっかり根を張って風に立ち向かう姿。そういうクセのある姿を絶妙なバランスで各所に配置し、しかも全体が自然な味わいを損なわない。どの一色物も、命の輝きにあふれている。

桑原専慶流いけばなテキスト723号　2023年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

涼をもとめて

＜12頁の花＞　仙溪

アレカ椰子（椰子科）
ヘリコニア・アンドロメダ（芭蕉科）
クルクマ（生姜科）
ガラス花器

鳥の羽根を大きくしたようなアレカヤシの葉は、その隙間からそよ風が吹いてきそうだ。1本の姿もいいが、数本を前後に重ねるとダイナミックな造形空間が生まれる。じっくり考えるのもいいが、水際ぎりぎりに葉がくるよう無造作に立ててゆく。

相手には南国の花が良く似合う。それらをアレカヤシの葉と葉の間に配置してゆく。足元が見えるので、剣山を小石で隠し、たっぷりの水を入れると水際も見せ場になる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
10月号
No.724

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

ハランの枯葉

＜2頁の花＞　仙溪

ペニセタム・パープル・マジェスティ（稲科）
スプレー菊（菊科）
葉蘭（はらん）の枯葉（百合科）
陶花瓶（宇野仁松作）

出逢いから生まれるいけばなを楽しもう。

暑さが緩（ゆる）むと庭のムクゲが二度目の盛期を迎える。毎日萎（しお）れた花を拾い集めているが、しゃがんで見ると繁みに隠れていた枯葉色に気付いた。ハランの枯葉だ。採り集めるとなかなかいい感じである。捨てずにおいたところ、相手に似合いそうな花材にも巡り会えて、このいけばなになった。

黒い穂はアフリカ原産の多年草をもとにアメリカで作られた園芸品種。強烈な個性をハランの枯葉が受け止めてくれている。

深紅のバラ

＜3頁の花＞　櫻子

榛（樺の木科）
薔薇（薔薇科）
嵯峨菊（菊科）
陶花瓶

いい赤色だ。美しいバラは一本でも様になる。客間のテーブル中央に一輪挿しにするだけで、部屋の空気が生き生きしてくる。上下に切り分けて、下の葉も生かすようにしている。

床の間や壁際の棚の上なら、他の枝や花をとり合わせて伸びやかに。その時季の花材を一緒にいけることで季節を感じる花になるよう心がけている。

一輪の深紅のバラを主役にして、ハシバミと白いサガギクを加えると、秋らしい表情を見せてくれた。

意外な組み合わせ

＜4頁の花＞　櫻子

丁字草（夾竹桃科）
五色唐辛子（茄子科）
ケローネ・スピードリオン
（胡麻の葉草科）

陶花瓶（八木一夫作）

今年は夏の猛暑の為花材が高騰して種類も少なかった。9月後半に入ってきれいな糸菊や薄が出荷されるようになり、どれだけ生産者の方々が大変な夏を乗り越えられたのだろうと思う。

少ない花でも目を凝らして何か珍しいものがないかと探し思案した。五色トウガラシもカメレオンと言う名前で売られているのは今まで知らずにいた。ケローネ・スピードリオンはリンドウによく似ているが、全く違っていて花が次々咲いてくる。どちらも暑さに平気で逞しそうだった。

少し黄葉したチョウジソウと合わせユニークな八木一夫さんの器に。

雪柳と寒菊

＜5頁の花＞　仙溪

雪柳（薔薇科）
寒菊（菊科）
煤竹竹筒

昨年の11月1日に撮影しているので少し早めの掲載だが、こんな生花をいけるのを心待ちにしていただきたく、早めに載せることにした。

カンギクは名前が示すように、晩秋から初冬に葉が紅く色づく頃の大変貴重な花材だったが、近頃はまだ葉が青い時期から出回るようになった。当然花の蕾は硬くて小さいが、よく水もあがり、長く保ってくれるし、いけておくとだんだん葉が色付いてくる。まだまだ手に入る地域は限られるかもしれないが、作り手が増えてくれることを願う花材の一つだ。

カンギクは初冬に黄色い花がようやく咲くが、その可愛らしさは格別である。それまでにまずは秋を堪能しよう。

秋の七草　生花

＜6頁の花＞　健一郎

薄（稲科）
藤袴（菊科）
葛（豆科）
萩（豆科）
女郎花（女郎花科）
桔梗2種（桔梗科）
河原撫子（撫子科）
煤竹竹筒

13世、14世の家元がテキストでいけた秋の七草の生花を見てから、自分もいつか挑戦してみたいなと思っているとふとその時は来るものである。秋の七草がタイミングよく一度に揃うことは難しく、三つのお花屋さんを訪ねて揃えた。お花屋さんで葛と萩さえ確保すればあとは運次第である。生け終わり、撮影の際に家元から副の萩の葉を残した方がいいと助言を頂いた。時間をおいて見返すとその大切さがよく

分かった。毎月のテキストの撮影での指導は僕のいけばなにとって大切な時間である。皆様に育てていただいているなとよく感じている。これからも変わらず、のびのびと花を生けていきたい。

野竹（のだけ）　生花

＜7頁の花＞　健一郎

野竹（芹（せり）科）

陶扁平壺

野にあると気が付かないのだが、お花屋さんで見かけるとよく目立っていた。その姿形がどこか新鮮で他に何も取り合わせず、お生花にした。切っているとセリ科独特のスッとする匂いがした。ある場所が変わるだけで印象は変わり存在感が増す。

中国の挿花

仙溪

中国にはどんな挿花の歴史があるのか。今に伝わる図像を見てみよう。

明の時代（1368～1644）はモンゴルの支配から脱し、漢民族によって中国が再び統一されて始まる。官僚・文人中心の文化が、広く一般民衆にまで広がっていった時代でもあった。

第十六代皇帝・熹宗（在位 1620～1627）はユニークで素晴らしい肖像画を描かせている。

絢爛たるデザインの絨毯が敷かれ、玉座の両脇には豪華な朱塗りの卓に様々な贅を尽くした日常の道具が描かれている。あちらこちらに皇帝の権力の象徴である龍が見え、これだけ多くの物を描いているにもかかわらず、全体は調和し、品格を感じさせる。

そして画面上段で一対の挿花が皇帝と並ぶ。花と器にはその人物の高い徳を象徴する役割があるのだろう。

拡大して見てみると、右側は装飾を凝らした紺色の花瓶（陶？ガラス？）に牡丹のように見えるバラの花が。左側には白梅と竹（の葉）に牡丹に見える椿（？）が挿してある。絵の中の皇帝に命を吹き込んでいるかのようだ。

なぜこれらの花が選ばれたのか、きっと深い意味があるに違いない。

「明の熹宗皇帝坐像」明代　台湾国立國立故宮博物院
明代皇帝の肖像画の中でひときわ異彩を放つ装飾性は精緻かつ豪華。

出典：https://theme.npm.edu.tw/opendata/DigitImageSets.aspx?sNo=04020370&Key= 花 ^21^11&pageNo=26

遠目では牡丹に見えるが、葉の形をよく見ると向かって右は薔薇で、左は萼の感じからして椿のようだ。
バラは一種でいけられ、ツバキ（？）には白梅と竹の葉との三種でいけられている。いけ方は自然体だが洗練されている。
皇帝が自らいけたものか、花をいけて飾る専門職があったのだろうか。

菊一色　立花

＜表紙の花＞　健一郎

菊・糸菊 数種（菊科）
小菊 数種（菊科）
乱れ菊 数種（菊科）
寒菊（菊科）
銅立花瓶

満開に咲いた菊達。菊の葉だけのあしらいをしたりして景色を出すのもいいが、咲いた菊もやはりいいものである。程よく茎に動きのある菊を副と請に生けることができた。立花の動きの要である。真にかがりび菊を生けているので正真は肥後系の菊を生けると華やかさが増す。できるだけの菊の種類を集め、景色に厚みをつくると重厚な立花になる。

請に力があるので左に流枝を出してバランスを整えた。

㊤ ノカンゾウは一日花だけど、毎日どれかが咲いてくれています。9月19日撮影。

㊨ 暑い日は網代の上が気持ちよかったにゃ。

同砂之物

花伝書を見る

紅葉一色　砂の物
（富春軒：初版）
楓　晒木　伊吹　柘植
苔株
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

画面の右下、屈曲しながら力強く晒木がのびる。おそらく伊吹（柏槙）が風雨に晒されたものだろう。厳しい環境を感じさせる。

その晒木の白さが楓の赤い葉を際立たせている。

さりげなく存在感を発しているのが苔生した株である。彩色の具合にもよるが、この絵図の場合は切り株というよりも、苔生した岩のようにも見え、とても瑞々しい。苔は楓を育てる水を蓄えているかのようだ。

乾いた晒木と、苔に覆われた株の対照が、色づく楓の命の美しさを強めている。

桑原専慶流いけばなテキスト724号　2023年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

サラシナショウマ

<12頁の花>　仙溪

更科升麻・晒菜升麻（金鳳花科）
山芍薬（牡丹科）
大毛蓼（蓼科）
流木
陶変形深鉢

中央アルプス登山の起点、千畳敷カールへはロープウェイで行ける。その日本一標高の高い駅に着くまで、様々な樹木の上を飛ぶように移動するのだが、木々の奥底に白い紐状のものが点々と見えた。サラシナショウマだ。8月末頃であった。かなりの高さからもそれと分かるほど印象深い白い花穂。切り花では長くはもたないが、しばしの間でもいけて、山の余韻を感じていたい。ヤマシャクヤクとオオケタデのそれぞれの赤色が白い花穂をより白く見せる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
11月号
No.725

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

香りの樹

櫻子

メラレウカ（フトモモ科）
薔薇（ばら）の実（薔薇科）
糸菊（菊科）
陶花瓶（市川博一作）

オーストラリアの常緑樹、メラレウカは葉に爽やかな香りがありエッセンシャルオイルが採れるものもある。三重県のタナカ園芸では数十種を育て、日本でも育つ16種のメラレウカを販売している。今後は公園や家庭の庭でも馴染みになるかも。

黄金色の枝をオレンジ色の背景にいけたらライムグリンに変身した不思議な樹。爽やかな黄緑色は秋のキクとも相性がいい。黄色の他に赤く色付く品種もある。葉付のバラの実が季節感を深めてくれる。

タナカ園芸のホームページより
①レボリューションゴールド　②オータムファイヤー
③メディカルティーツリー　④タイムハニーマータル

高砂百合の実

櫻子

丸葉の木（満作科）
糸菊（菊科）
高砂百合の実（百合科）
陶花瓶

この長細い緑の実はタカサゴユリの実。細長い茎と細長い葉が見分けるポイント。一本に沢山の花が咲くので数個の実ができるが、おそらく産地で実の数を減らして育てているのだろう。軽やかな姿は秋の花と合わせやすい。台湾原産で「タカサゴ」は台湾の昔の呼び名だそうだ。

マルバノキは岐阜県、高知県、広島県に隔離分布する、氷河期残存種で日本固有の植物。マンサクに似た姿の赤い小花が秋に咲くのでベニマンサクの別名がある。丸い葉の色付きが目を楽しませてくれる。

器の飴色の釉薬がマルバノキの葉によく似合う。ピンクの菊が優しく重なる。

稽古の花　①

10月3日撮影　仙溪

梅花躑躅（躑躅科）
菊2種（菊科）
陶水盤

近年花の値段が上がっている。税抜き1300円で稽古花の参考にいけてみた。

但し地域によって花の値段は変わる。同じ地域でも花屋によっても違いがある。品揃えや品質が良い花屋では単価は高くなるかわりに、良いとり合わせが期待できる。

写真の花は秋の菊が出始める前に品薄で菊の値段が高騰していた頃、菊2本とバイカツツジは一本の半分量だが、季節を味わうには充分だ。ツツジの艶のある葉の色づきと、丸花スプレーギクの臙脂色が秋を感じさせてくれる。良い状態の菊の葉はすべて大切にいけている。

椿の実

仙溪

椿（椿科）

陶花瓶

ツバキの捻（ひね）た枝に実がついて売られていたので生花にしてみた。なんとか形にはなったというところか。艶やかな丸い実は数日後に弾けて種が落ちていた。爆（は）ぜた実も趣（おもむき）がありいいものだが、もう葉に力が無くなっていたので飾っておくのを断念した。生花にせず投入でいけていたらもっと保ったかもしれない。

この先、寒さに当たって実に赤みがさす頃に、風情を生かしてまたいけてみたい。

蓮一色砂物　健一郎

蓮（睡蓮科）　葦（稲科）
姫岩菖蒲（百合科）
小菊（菊科）
銅砂鉢

今年も、藤井隆也さんの屏風と共に鹿王院さんにて、社中展をする事ができた。お花の気持ちよさそうな空間を作る事を心がけての展覧会で、花の様子を見ている限り成功したのではないかと思っている。

写真の花は、今年の夏に立てた立花の蓮の葉を乾かし、茎も取っておいた。虚実綯交ぜの景色。それぞれがそれぞれに反応している。あしらいの葦が蓮をより引き立てている。枯れても綺麗だったが、やはり、緑が綺麗な方が良い。場にあったいい花が立てられた。次は葉がもう少し太陽に当たって茶色くなった葉で生けてみたく思っている。

正真のヒメイワショウブが可愛らしく全体に勢いをつけている。枯れものを生けるときには、雌株の小菊など、生きたお花がより綺麗に見え、枯れものも生きる。枯れものだけでは、枯れものの良さは伝わらないと思っている。

松一色立花

健一郎

松（松科）
晒木
陶花瓶（宮下善爾作）

藤井隆也さんの松を生けるために作られた屏風の前に松一色の立花を立てた。今回お花屋さんに用意してもらったのは、北陸地方のなんとも上品でつややかな葉で自由な枝ぶりの松。その辺に生えていても見過ごしてしまいそうなものだが、花フジさん、流石の審美眼である。自分もこうありたいと思ってしまうような松だった。

今までの松一色とは比べ物にならない難しさで、形にするのに悩んだ。今まで色々な松に触れてきた。生けたと言う意味ではなく、どこに行っても松があれば触れてみたくなるのだがこのような松には出会ったことがない。会期中を通して毎日枝を足したり引いたりして楽しんだが、まだしっくりときていない。生けると最後は納得することが大半なのだが、なかなか難しいものである。

同

花伝書を見る

松一色（行：初版）
冨春軒
松　苔　松毬（まつかさ）

（立花時勢粧・下　秘曲の図）

山深く人跡未踏の仙境を行者の如くに分け入ってはじめて出逢えるような景色とでも言えばいいのだろうか。岩の隙間に根を張って風雨に堪える松の姿。どれも並の松ではない。様々な個性が混沌としつつ調和する凄さ。銅器の龍が今にも松樹の間を縫って天に昇ってゆきそうな気配がこの松一色にはある。

この図だけ「冨春軒」の名前が草書体になっているのは何故だろう。

冨春軒が問いかけてくる。

「君は自然と一体になれたかい？」

彼岸の記憶

＜表紙の花＞　仙溪

彼岸花（彼岸花科）
薄（稲科）
プロテア・コルダータ
（ヤマモガシ科）
飴色釉陶花器

彼岸の頃、奈良の葛城山にススキを見に行った。東に大和盆地、西に大阪平野が見渡せる山頂はススキの原。白い穂が風に舞い輝く。帰路は黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花を見ながら御所駅まで歩いた。大和朝廷ゆかりの地を訪れた印象をいけた。

ロープウェイで葛城山山頂へ。春はツツジの花、冬は雪景色が楽しめる。

葛城山麓から大和盆地に広がる田園。

第56回 日本いけばな芸術展

東京 日本橋高島屋
第2次展 9月29日(金)～30日(土)

中国旅行記

健一郎

今までの旅は、頭から言葉がたくさん湧いて出てきた。帰りのフライトで言葉が溢れてそれを文字に懸命に起こしていたのをよく覚えている。時には旅の途中で言葉が溢れ、文字に起こしていた。言葉が頭に浮かんでは消える。あるうちに形として残したくなる。今では妻も慣れたようだが、入浴中に頭を泡まみれにして、腰にタオルだけ巻いて消えてなくなりそうな言葉を控えることはいまでもよくある。

今回の中国の安徽省～浙江省の旅では、頭に言葉が残らなかった。その代わり、身体にはまだ感覚が残るという変わった旅だった。

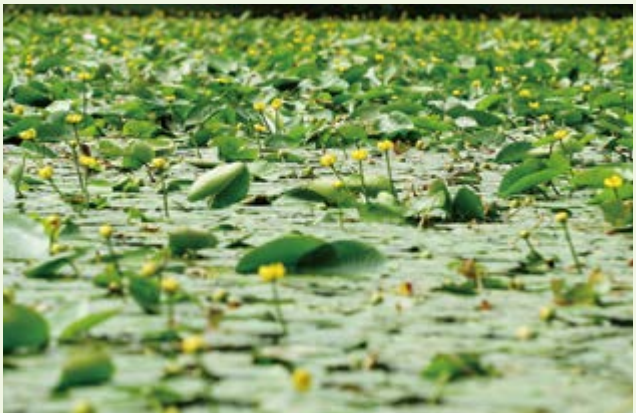
アヒルや、カエル、鳥の足の食感、そして舌に残る山椒のピリピリや喉の奥を突くような唐辛子。柄に柄を合わせるような感覚で、臭みのあったであろう肉も食事になっているのには驚いた。普段慣れない野菜も、含めてどれも美味しくいただいた。日本には無いものの生かし方が新鮮で面白かった。パイナップルに、蜂蜜梅干しを少し挟んであったのは一つの例である。

仙境を彷彿とさせる黄山に登った日、山頂で夜中に冷たい石の上に座り、寝転がり、目を瞑り呼吸をしていると身体が山の空気と交わっている気がした。その後、景色を見ながらインスタントのラーメンを食べながら雲が去るのを待っていると、1時間ほどだけだが星が望めた。いい夜だった。

日の出前、深い霧が動き、松の露が滴る音の中、たくさんの人が日の出を一目見ようと待っていた。僕達は山頂のホテルに泊まったが、一晩、山頂付近で朝の陽を待つ人が大勢いた。日の出の1時間前から待っていたのだが、ダウンを着ていても寒さが身体に伝わる。皆よく一晩を越したものだと驚かさせられた。

日の出を待ち望む人々の声。曇り方が強く、見えないであろうと諦めかけていた時にほんの10分ほど薄雲になり、日の出を見る事ができた。外で一晩を越しても見る価値のある10分だったなと思えた。早朝の鳥の鳴き声を聞きながらの下山は気持ちが良かった。山法師の実を食べるリスも鮮明に覚えている。

富春山の麓では金木犀の香りが場を包み込んで



いた。竹の葉が揺れる音を感じながら、様々な樹木、草花と川のせせらぎが迎えてくれる。その奥に虫の音が聞こえる。湿度も高く、豊かな場所で、決して特別な樹木昆虫は見かけなかったが、関係性の中で全ての生き物が生き生きとしているように見えた。個人的にはオトコエシが蜘蛛の巣に巻き込まれ、一本だけ上を向いている姿が印象的だった。

前日に夕食でお世話になった山の中のお店で、木を数本頂いてお花を生ける時間は特別なものだった。忘れられない富春山での思い出である。こんなに贅沢な経験はできないだろう。本当に気持ちが良かった。富春江で触れた柳の揺れる音と、木々の感触、釣りをしている人をちらほらと見かけた。景色があたたかく身にしみる。今もまだよく釣れるらしい。魚を釣るところを見せてくれた。西湖では、柳の葉と人の声が共にあるのが心地良かった。

香り、食感、触れたものの感触、木や、虫の声の余韻がまだ残っている。

考えずに中国で在れたのは間違い無く、かよ（龙嘉代）さんのおかげだ。浙江省は地元で、富春山で幼少期はスイカを食べたり、水を汲んで飲む事、蛇の話を楽しそうにしてくれた。中国に関心を持ってくれる事が嬉しいのだと言う。

そして僕の趣味趣向に合わせて旅のドライブとエスコートをしてくれた。登山もだが各場所をゆっくりとたくさん歩いた。その場所、場所で過ごせた事は僕の宝物になっている。一週間、本当にありがとうございました。次は妻と柊介と一緒に、大好きな日本をうんと紹介したく思っています。

通常下調べは言葉で行う。今回は一切していない。言葉を使わない事が新鮮で、新しい感覚での中国の旅につながった。

言葉にできるほどの語彙力も持ち合わせていないからなのか、言葉に収まりきれないほどの体験をしたのかは分からない。

言葉で考えた事は言葉で残せばいい。感じた事は何で残せば良いのだろうか。残らないから、また感じたくなるのだろうか。写真や動画を見返して、想像するしか無いのだろうか。想起するためには、その場でしっかりとそのものを味わっている事が条件である。

いい旅だった！

桑原専慶流いけばなテキスト725号　2023年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

緑の温もり

仙溪

姫榧杉（檜科）
ダリア（菊科）
ストック（油菜科）
陶花器

年の終わりが近づくにつれ、赤い花と白い花の組み合わせが恋しくなる。この花は昨年12月6日撮影。赤いダリアと白いストックがその時の気分にぴったりしていた。しかし問題はそれらに合わせるもう一種の花材だ。近年増えて来たヒムロスギがそんな悩みをかき消してくれる。フワフワした葉はデリケートな花にも優しく寄り添ってくれる。温もりを感じる質感が、初冬の冷たさに心地よい。

ヒムロスギはサワラの園芸品種で、なぜかサツマスギの名で出回っていた。包まれて萎縮した枝を丁寧に広げると、本来の張りをとりもどして生き生きしてくる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
12月号
No.726

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

シンフォリカルポス

櫻子

シンフォリカルポス（忍冬科）
ダリア2種（菊科）
木苺「構苺」（薔薇科）
陶角花瓶（フランス）

中々覚えられない名前だが、こんなに立派な実をいけたら絶対忘れないだろう。スイカズラ科と言うが似ているとは思えない。

北アメリカ原産でスノーベリーとも言う。白い実が多かったが、紫式部の実と間違うような鮮やかなワインレッド色で実の粒も大きく長くしなやかだ。

今年はヒペリカムやウインターベリー（ウメモドキ）など日持ちがするきれいな枝の園芸種をいける機会が多かった。シンフォリカルポスも又鮮やかな洋花と取り合わせると良く似合う。赤白のダリアといけて、洋間の花として長く楽しんだ。

ネズミモチの実

櫻子

鼠黐（木犀科）
薔薇（薔薇科）

アンティーク水差し

アメリカに住むドイツ人夫婦に戴いた水差しにネズミモチと赤いバラをいけた。口が小さく首も細いので多くはいけられないが、このくらいの量が丁度似合っている。

打ち出しによって繊細な装飾が施されている。四頭の羊が四方を向き、子羊と子供が戯れる場面も。美と豊かさと平和を表しているのだろう。

「美」という漢字は「羊」と「大」でできている。古代中国では豊かさをもたらしてくれる大きな羊に感謝をこめて「美」の文字をつくった。現在の私たちも何を「美しい」と感じるか、固定概念にとらわれず、大らかな心で「感じる」ことを大切にしたい。

南天の立花

仙溪

南天（目木科）
赤芽柳（柳科）
若松（松科）
白梅（薔薇科）
水仙（彼岸花科）
千両（千両科）
寒菊（菊科）
枇杷（薔薇科）

陶花瓶

昨年12月24日に稽古で立てた立花。撮影したのは1月10日。寒い座敷に飾っていたが、カンギクが咲いて華やいできた頃だ。ナンテンの葉は少し散ってしまったが存在感は充分。

正真の前と左右に加えたビワの葉が花型の引き締め役になっている。横から見ても程良く中を隠してくれている。ビワの葉は大きさ、曲がり具合によって使い分ける。立派な葉なら一葉で役枝にもなる。

白い実と白い花

仙溪

白梅擬（黐の木科）
水仙（彼岸花科）
白椿（椿科）
獅子耳銅立花瓶

小ぶりの立花瓶に格の高い花材3種を投入でいけた。白実のシロウメモドキはいける機会も希なので、その白色に敬意を示せるような相手を探していたところ、敢えて白い花をとり合わてみてはどうかと閃いた。

以前、ドイツで白い花だけの庭を見たことを思い出した。様々な白い花が咲く庭は幻想的で、庭をつくった人の色へのこだわりを強く感じた。同色の濃淡の世界は、その色の世界へ誘われる感覚を与えてくれるのだと思う。

3種の白色をいける器の選択もなかなか難しい。色を感じさせない銅器を選んだ。

菊一色（きくいっしき）　砂物（すなもの）

健一郎

乱れ菊数種（菊科）

陶砂鉢

今年も無事に乱れ菊を生けることができた。株分けならではの見せ方が、少しは様になってきたのかなと感じている。今回は両者の胴～前置きにかけての景色の差が見どころである。雄株の正真は、全体のバランスを考え、左に振った。今回1番悩んだのが器である。いくつもの器をあてがったが、納得のいくものがなかった。砂物を丸い水盤でしても良く映るときもあるが、やはり砂鉢がよく似合う。銅器ほど重たくなく、色が抑えられたものでも良かったかもしれない。砂利、敷板、バック紙で調節した。自由気ままに勢いよくうねる菊は見ていて飽きない。

クシフィディウム・カエルレウム

健一郎

クシフィディウム・
カエルレウム（ハエモドルム科）
デンファレ（蘭科）
陶花器（市川博一作）

南米の春の花で、花屋さん曰く葉だけでは見かけるが、花が出荷されるのは珍しいので、撮影のために用意しましたとの事。初めて見る花だったのでゆっくりと楽しませてもらった。白い蕾が咲く前だったので、同じ熱帯のデンファレと合わせ、熱帯の自然を散策した。図鑑やインターネットで自生地を想像して生けた。シンプルな姿形をしてはいるが、クシフィディウムの周りはおそらく多種多様な生き物たちの暮らす場であるだろう。生物多様なこの地域では同じ木を探すことが難しいらしい。そんなことを想像していたらこの器に生けてみたくなった。

水仙一色

花伝書を見る

水仙一色（真：初版）
冨春軒
水仙　金盞花　著栽
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

自由奔放な水仙の姿。これらは葉に針金を通して形作ったものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

どの水仙も行儀の悪い扱いがたい姿をしているが、それは雪に倒れ風に翻弄されても葉を伸ばそうとする命の姿であり、冨春軒はそういうものに自然本来の力と美を見いだしている。まさに「花は野にあるように」挿している。

稽古の花　②

＜表紙の花＞

11月7日撮影　仙溪

梅擬「ウィンターベリー」（黐の木科）

薔薇（薔薇科）

スプレー菊（菊科）

陶花器

稽古花のとり合わせはできる限り花屋に行ってするようにしている。今の季節にこの花なら喜んでもらえるかな、というのが基準になる。前回と同じ花は避けている。「またこの花？」とならないように。多くの花や木の中から、ピカッと光を放っているものを選ぶ。葉の状態、互いの色合い。

今回はバラに一目惚れ。悩んだ末にこの3種になった。（税抜き1300円。）

躑躅と乱れ菊の生花

仙溪

躑躅（躑躅科）

乱れ菊2種（菊科）

龍耳銅薄端

兵庫県いけばな協会創立70周年記念花展にゲストとして出品させていただいた。

苔をまとい葉を赤くしたツツジの美しさ。大自然の時の流れに思いを馳せる。そして乱れ菊のなんと優美なこと。

ツツジとキクの二種挿しをいけるのは初めてだったが、元々の姿をパズルのように組み合わせるだけでなんとか形になった。力のある花材をこなすのは難しいが、木や花の力を損なわないようにすれば、自ずと良い表情を見せてくれるのだということを、今回は花に教わった。

なお、植物の専門家による花材名の確認をしておられたが、これはサツキですとのこと。知っているようで知らないことがまだまだ沢山ある。

中国の挿花（そうか）　②

仙溪

台湾・故宮博物院がデジタルで公開している所蔵品に中国挿花の痕跡を辿ってみた。前号は明代（みんだい）後期の宮廷肖像画（しょうぞうが）だったが、今回は明代初期、宣徳帝（せんとくてい）（第5代皇帝）の時代の「歳朝図（さいちょうず）」を紹介したい。歳朝とは新年元日のことで、春節の風俗を描いた絵を「歳朝図」と呼んでいる。

左の軸は宣徳2年（1427年）、邊景昭（へんけいしょう）（字は文進（ぶんしん）、明代初期の宮廷花鳥画家）による「歳朝図」で、古代の銅器（銅尊（どうそん））に10種類の花などが挿されている。

梅（清高）
松（寿）
柏（はく）（誠実）
椿（富貴）
蘭（幽玄）
水仙（品潔）
南天（消災解厄）
柿（万事順調）
如意（にょい）（自在）
霊芝（れいし）（健康）

の10種それぞれに、徳や吉祥、厄除け、健康などを願う寓意（ぐうい）があり、新年を迎えた宮中で実際に挿されたものを絵で記録し、その後、春節には毎年この絵を飾ったのだろう。絵の上部に見える2首の詩は、300年後の清朝6代皇帝乾隆が書き加えたものである。

植物に個別の寓意をもたせ、その組み合わせを大切にするのは、中国挿花の重要な要素であるようだ。

いけ方は四方正面だろうか。如意や霊芝など多種類が調和し躍動感もある。高い教養と確かな技術を感じる。

さて、この挿花図が描かれた頃、日本は室町時代中期で、いけばなの歴史としては「立て花」が立てられはじめた頃にあたる。中国の挿花がどんな歴史をたどり、それぞれの時代の交流で日本の挿花がどのように影響を受けたのか、興味は尽きない。

「霊芝（れいし）」

「如意（にょい）」

「歳朝図」明代　邊景昭　台湾国立故宮博物院
歳朝とは正月の一日目をさし、歳朝を主題とした吉祥画が多く描かれた。この絵にも新春にふさわしい植物が描かれ、新年を迎えた喜びが満ちあふれている。邊景昭は明代初期、14c 末～ 15c 前半の宮廷画家。
出典：https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5790&Dept=P

イケバナインターナショナル大阪例会
デモンストレーション
会期　11月17日㈮
会場　ホテルニューオータニ大阪
講師　桑原健一郎
（写真①）

風流なレモンとメイ。
「ヒイラギの香りがするにゃ」

桑原専慶流いけばなテキスト726号　2023年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

エジプトはナイルの賜物（たまもの）

健一郎

綿（わた）（葵（あおい）科）
アロエ（百合科）
枯葦（かれあし）（稲科）
金属花器（エジプト）

アロエは不老不死の植物として用いられており、ファラオ王に埋葬品としてアロエが贈られていたりしたという。そしてアロエが人々の美容と健康を支える植物でもあった。世界最長のナイル川が氾濫を起こし、エジプトに養分をもたらした。食べ物はもちろんそこから文明が築かれた。麦や綿を栽培し、そして葦で家を作って日々の生活を営んだ。川が生活を支えたのである。花を介して想像するとより感じられる気がする。花屋さんの花を通して生けている内に、年々世界中の気候帯や世界の植物の原生地を歩いてみたい気持ちが募っている。長い目で見て、少しづつ予定を立てているところだ。